

もけい

くにむらせいじ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ビーバーとプレーリーが、ジャパリバスの模型を作った。嵐の日、ふたりの前に、フレンドでもセルリアンでもない、模型がヒト化した子が現れる。プレーリーは、その子に「ぼすの」という名を与える。三人は仲良くなつていく。はかせはプレーリーとビーバーに「痛い目にあう」と警告する。

アニメーション期その後。台本っぽい変な書き方をしています。ガールズラブのタグがありますが百合要素は少しだけです。

タグが多いのは制限字数ぴったりに収める遊びです。

# 目次

第1話	かたどる	1
第2話	おかあさん	16
第3話	水と土	31
第4話	戻る	45
第5話	選択	61
第6話	かたち	78
あとがき・設定		92
第13話	おまけ	107



# 第1話 かたどる

かばんたちが、島を旅立ったあとの、夏。湖のログハウスの二階。

オグロプレーリードッグ（以下プレーリー）「すばらしい出来でありますー！」

木のテーブル ※1 の上に、ジャパリバスの模型が置いてあった。アメリカビバーは椅子 ※2 に座って、テーブルに向かっており、プレーリーは、立って、バスの模型を見下ろしていた。バスの模型は、全長が500mほどで、精巧に作られていた。

アメリカビバー（以下ビバー）「もうちよつといじりたいツスね。こことか」

ビバーが、バスの模型の、行き先表示板を指差した。

プレーリー「ビバーどの、いいかげん休まないと、倒れるであります……」

ビバー「やりはじめると、止まらなくなっちゃうんすよ。……そうっすね。きょうはここまでにしておくツス」

プレーリー「また、手伝わせてほしいであります！」

ビバー「おねがいするツス。でも、こわさないでほしいツス……」

1週間ほど前。

プレーリー 「まんまるが、まわるでありますな！　すごいであります！」

プレーリーが、バスの模型のホイール（トラクターの、フロントの左側のホイール）を、つかんで回した。キコキコと音がした。

ビーバー 「それ、乱暴にすると……」

パキつと音がした。

プレーリー 「あ」

軸受けが壊れ、車軸が折れて、ホイールが外れた。

ビーバー 「あああー!!」

現在。

ビーバー 「あれ、なおすの大変だったツスよ……」

プレーリー 「めんぼくないであります……」

ビーバー 「あそこは、なおして、もろくなってるから、あんまりさわっちゃだめツスよ」

数日後。「1日目」 ログハウスの二階。

その日は、昼前から激しい雨が降り、風も強く、雨が室内に吹き込んでいた。ビーバーは、ベランダ ※3 から湖を見下ろしていた。

ビーバー 「水かさが増してるツスね……。ちよいと、ダムのようなすを見てくるツス。プレーリーさんは、先に向こう岸へ避難してください」

プレーリー 「だめでありませう！ なんかいやな予感が！」 ※4

ビーバー 「そこまであぶない天気じゃないツスよ。水かさが増して、穴に水が流れ込んでしまうほうがあぶないツスから」

ふたりは、はしごを下りた。ビーバーは、湖を泳いで、ダムに向かった。

プレーリーは、トンネルを抜けて、湖岸側のトンネル入り口の、雨除け屋根の下で雨宿りした。

地響きのような音がした。プレーリーが、ドアを開けて、音のした方を見ると、サンドスターの出る山が、小規模な噴火を起こしていた。

午後遅く。湖のダム。

ビーバーが、水につかりながら、ダムの放水作業と点検をしていると、少し離れた所に、何かが流れてきたことに気づいた。

ビーバー 「あの！ だいじょぶツスカー!？」

流れてきたものは、人の形をしていて、あおむけになつていた。それは、ビーバーのいる場所から、少し離れたところにある、放水口に向かって流れていった。

ビーバー 「そつちはあぶないツスよ！」

ビーバーは、慌ててそちらに泳いでいった。

夕方を過ぎ、わずかに太陽の光が残っていたころ。ログハウスの二階。

雨は止んで、風も弱まってきていた。

プレーリーが、ベッドの端に座つて、うなだれていた。バスの模型が置いてあつたテーブルには、模型が無く、ホイールが一つだけ残されていた。 ※5 テーブルの天板は、濡れていた。

ビーバーが、はしごを登ってきた。プレーリー立ち上がり、ビーバーを迎えた。

プレーリー 「ビーバーどの！ 無事でありましたか!？」

ビーバー 「遅くなつてもうしわけないツス」

ビーバーは、はしごを登り切らず、止まった。

ビーバー 「えつと、ひとを、紹介するツス……」

ビーバーが階下を見ると、プレーリーも、つられて階下を見た。そこには、ヒトの姿をしたものが立っていて、こちらを見上げていた。それは、木目調の服を着ていて、髪



も木目調だった。腕が半透明の緑色で、うっすらと光って見えた。あとは、暗くて良く見えなかった。

ビーバー 「はしご、のぼれないツスか？」

ヒトの姿をしたものは、答えなかった。

プレーリー 「こちらからおりるであります」

プレーリーとビーバーは、階下に下りて、ヒトの姿をしたものと向き合った。

プレーリー 「初めまして。プレーリードックであります！ あなたは、なんのフレンズでありますか？」

フレンズらしきものは、答えなかった。

近くで見ると、そのフレンズらしきものは、少し、かばんに似た顔立ちで、女の子のように見えた。瞳は暗い緑色で、髪はセミロングだった。背の高さは、プレーリー・ビーバーよりやや低いくらいだった。

プレーリー 「なにも言ってくれないであります……」

ビーバー 「さつきからずっとこの調子で……。たぶん、生まれたばかりなんスよ。でもこの子、あんまりフレンズっぽくないんスよね……」

プレーリーが、フレンズのような子の腕を見た。二の腕からひじを含む部分が肌色で、そこから先、前腕から手までが半透明の緑色だった。緑色の部分はうっすらと光つ

て見えて、その内部には、細かい泡のようなものが動いていた。

プレーリー 「そのうで、まさかセルリアン！」

ビーバー 「セルリアンでもなさそうなんツスよ。おいが木みたいだし……」

プレーリー 「とりあえず、ごあいさつをさせていただきたいであります！」

プレーリーが、フレンズのような子に駆け寄り、その子の頭を両手でおさえて、キスをした。フレンズのような子は、されるがままだった。プレーリーが、何かに驚いて目を見開き、再び閉じて、こくん、と何かを飲み込み、唇を離れた。

プレーリー 「けほっ」

プレーリーが手で口をぬぐうと、手に緑色の液体が付いていた。

プレーリー 「まずい……もう一回であります！」

プレーリーが再びキスをしようとすると、ビーバーがプレーリーの腕をつかんで引っ張り、キスを止めた。

ビーバー 「なんでまずいのにな回もするんスカ……」

ビーバーの表情と声は暗かった。

プレーリー 「なにやらかなつかしい感じがして、本能が飲めと言っているであります

！………こんな味であります………んっ」

プレーリーがビーバーにキスをした。すぐに、ふたりの唇が離れた。

ビーバー 「……ちよつとにがいけど、おいしいツスね……。これ、葉っぱの味ツスよ」

プレーリー 「葉っぱの味？ 木のおい？」

ビーバー 「木のフレンズつてことツスカね……。でも植物はフレンズ化しないはず……」

プレーリー 「じゃあ、やっぱりセルリアン!？」

ビーバー 「セルリアンは、石とかから生まれる、つてきいたことがあるツス。だから、この子は、セルリアンではないツスよ」

プレーリー 「では、この子は何者でありますか!？」

ビーバー 「この子、どこかで見たような……」

ビーバーが、『フレンズでもセルリアンでもない何者か』を、上から下まで眺めた。

ビーバー 「……バス?」

その子の、服のパーツや、髪留めなどのアクセサリーが、バスのパーツに似ていた。プレーリー 「……わすれていたであります! ここに戻ってきたら、あの模型がなくなっていたであります!」

プレーリーとビーバーが、テーブルの上に残されていた、バスの模型のホイールを見た。ふたりは、『フレンズでもセルリアンでもない何者か』の方に向きなあった。

ビーバー 「この子、バスの模型なんツスよ……」

プレリーリー 「模型の、フレンズ？ そんなのきいたことないであります……」  
周囲は暗くなりつつあった。

ビーバー 「きょうはもうおそいツスから、上で休んでもらいましょう。はしごのぼりかたを教えてあげるツス」

10分ほど経った。

プレリーリーとビーバーが、『バスの模型の子』に、はしごの登りかたを教えていた。プレリーリーは下から、ビーバーは上から声をかけていた。

プレリーリー 「足をつぎの段にかけるであります」

『バスの模型の子』が、ゆっくりとはしごの段に足をかけた。

ビーバー 「手をあげて、そう、そこで、体を上へ……」

バスの模型の子が、はしごの中ほどまでのぼったところで、その子の足が、うまく段にかからず、段をかすった。

バスの模型の子が、はしごから落ちた。

バスの模型の子を、下にいたプレリーリーが受け止めようとした。

プレリーリー 「どわあ!!」

プレーリーは、バスの模型の子を支えきれず、バスの模型の子といっしょに、トンネルの中へ落ちていった。 ※6

ビーバー 「あああー！ だいじょうぶツスカー!？」

翌日。「2日目」 トンネルの中。

トンネルの縦穴から、トンネルの中へ光が差し込んでいた。 ※7 プレーリーとビーバーが、隣り合って丸太に座っていた。そのふたりに向かい合って、バスの模型の子が、丸太に座っていた。

ビーバーが、バスの模型の子を見た。

ビーバー 「えっと、あなたの名前を、おしえてほしいツス」

バスの模型の子「……………」

バスの模型の子は、ビーバーを見たが、無表情で、なにも言わなかった。

プレーリー 「あなた、ひよつとして、しゃべ……………」

ビーバーが、プレーリーに軽くひじ打ちした。

ビーバー 「…………この子、バスの模型」、だから、それが名前つてことツスカね

……………」

プレーリー 「バスの模型どの、だと名前つぽくないであります」

ビーバー 「じゃあ、呼び方を考えてあげましょう。……えっと、バスさん、でどうツスカ？」

バスの模型の子は、ビーバーを見た。無表情な中に、不満の色が見えた。

プレーリー 「模型も、呼び方に入れてあげたいであります」

ビーバー 「じゃあ、……ばすもさん」

バスの模型の子が、一瞬驚いた顔をして、ほんの少しうつむいた。

ビーバー 「それじゃ、いやツスカ？」

プレーリー 「ばすの、はどうでありますか？」

ビーバー 「プレーリーさん、それ切っただけツスよ……」

ビーバーは、あきれるでも非難するでもなく、細い声だった。

バスの模型の子が、顔を上げ、プレーリーを見た。そして、ビーバーを見た。戸惑っているようだった。

間。

バスの模型の子が、ふたりを見て、口を開いた。

バスの模型の子「……ばすの」

バスの模型の子の声は、高くてかわいらしかったが、幼い子供の声とは少し違った。

プレーリーとビーバーが、目を見開いて驚いた。

プレーリー 「ぼすの、でいいでありますか？」

『ぼすの』とつぶやいた子は、プレーリーの方に右手の人差し指を向けた。そして、ゆつくりとプレーリーの下唇にふれた。

ビーバー 「気にいってくれた、みたいツスね」

ビーバーが、プレーリーの方を見て、微笑んだ。

プレーリー 「ちよつと、感動したであります……」

『ぼすの』と名付けられた子は、トンネルの縦穴から差し込む光を見た。

ビーバー 「外に、出たいツスカ？」

昨日と同じように、トンネルの縦穴の登り方を、ぼすのに教えることになった。今回は、プレーリーが上から見守り、ビーバーが下から見守った。

ビーバー 「落ちないように、気をつけるツスよ……」

ぼすのは、足かけ用の段（はしご状）のついた、トンネルの壁を、するすると登っていった。

ビーバー 「え？ そんな、むりしないで……」

プレーリー 「その調子であります！」

プレーリーが、のぼってきたぼすのの左手を掴もうとして、途中でやめた。ぼすのは、縦穴を登りきった。

プレーリー 「すごい、すごいであります！」

ビーバー 「よくできたツスよ！　きのうとぜんぜんちがうツスね」

ビーバーが、ジャパリマンを持って、縦穴を登ってきた。ジャパリマンは、袋入りで、三つあった。

ばすのは、ログハウスの影から出て、軽く両腕を広げて、太陽の光を受けた。腕の、緑色の部分の中の、たくさん粒が、キラキラと光っていた。

ビーバー 「きれい……」

プレーリー 「あかるいところが好き、でありますか？」

三人は、ログハウスのわきの、小高い草地の上に座った。

ビーバー 「ジャパリマン、食べ物、わかるツスか？」

ビーバーが、袋入りのジャパリマンを一つ、ばすのに渡した。

ばすのは、袋ごとジャパリマンにかじりついた。

ビーバー 「そのまま食べちゃだめツスよ！」

ビーバーが、ばすのに、ジャパリマンを袋から出すことを教えた。

ばすのが、ジャパリマンを半分ほど食べたところで、食べるのをやめた。

プレーリー 「どうした、でありますか？」

ビーバー 「おいしくなかったツスか？」



ばすのが、半分ほど残したジャパリまんを、さらに半分に割った。そして、それの一つを、ビーバーに渡そうとした。

ビーバー 「そんな、オレっちは自分の分があるツスから……」

プリーリー 「ぜんぶ、ばすのどの分でもあります」

ばすの 「こんなにならない、おかあさん」 ※8

つづく

※1 木のテーブルは、アニメ7話でアライさんが座っていたもの（丸太の輪切り。椅子としてはかなり高い）に、四角い板を乗せたものです。

→テーブルの設定画です。

※2 椅子は、アニメ1期7話で、アライさんが座っていたものを、低くした形のものです。

ただ、テーブルもそうですが、あの丸太組みの床に直置きすると、不安定な気がします。

※3 アニメで、プレーターとピーバーが作ったログハウスには、二階部分を一周するように、幅の狭いベランダのようなものがあります。ただ、あれをベランダと呼んでいるのかは、わかりません。正しい呼び方がわからないので、「ベランダ」と書いています。

※4 大雨の中「様子を見てくる」のは危険です。大雨の前に放水量の調整をするべきなのですが、フレنزには、未来の天気を知る方法がありません。（感覚で、天気を予測できるフレنزもいそようですが）

※5 トラクター（運転席）の、フロントの左側のホイールです。プレーターが壊した所です。

※6 プレーターは、すぐ下がトンネルの入り口だったため、足場の悪い所に立っていました。ログハウスの一階（地上）から二階にかかっているはしごの、下端は、トンネルの縦穴のふちギリギリの所についています。それなので、プレーターは縦穴のふちに立たなければなりませんでした。

※7 三人とも、昨晩はトンネルの中で眠りました。ふたりがトンネル落ちた際に、プレーターがぼすのの下敷きになりましたが、ふたりに怪我はありませんでした。

※8 「こんなにいけない」と言ったのは、ばすのの体が、普通のフレンズよりもエネルギーの消費が少ないためです。もともと燃費が良いことに加えて、光合成である程度エネルギーを補うこともできます。その反面、動きは遅く、力も弱いです。

次回予告（実験的なものです）

ばすの 「……こわれた」

プレーリー 「ビーバーどのは、過保護であります……」

ばすの 「死んでる」

ビーバー 「なんで、わらえるんスカ……」

はかせ 「痛い目にあうですよ」

次回 第2話 『おかあさん』

## 第2話 おかあさん

ばすの 「こんなにいけない、おかあさん」

ビーバー 「え？」

驚いて、なにも言えなくなったビーバーは、ジャパリまんのかけらを受け取った。

ばすの 「これ、おとうさん」

ばすのは、もう一つのかけらを、プレーリーに渡した。

プレーリー 「……自分は、おとうさんじゃない、で、ありま……」

プレーリーは、うろたえていた。

ビーバー 「ある意味、正しいツスね……いいじゃないツスカ、これで……」

ビーバーは、感慨深げに、受け取ったジャパリまんのかけらを見つめた。

プレーリーが、ビーバーの方を向いた。

プレーリー 「これで、はれて夫婦でありますな！」

ビーバー 「それはちがうツスよ！」

ビーバーは、顔を赤くして、慌てた様子だった。

プレーリー 「……ちがう、でありますか？」

プレーリーは、真剣な表情だった。

ビーバー 「……えっと、ちがわない、かも……」

ビーバーは、うつむいて、小さな声で言った。

ぼすのが、ログハウスの二階を見た。

ビーバー 「ぼすのが、うまれた場所、行ってみるツスか？」

ぼすのは、昨日失敗した、はしご登りを行った。昨日とは逆に、プレーリーが二階に、ビーバーが一階に待機した。

ぼすのは、ゆっくりと、おぼつかない感じで、はしごを登っていった。

ビーバー 「あれ？ さっきと違う……気をつけるツスよ……」 ※1

ぼすのが、あと少しではしごを登りきれる所で、足を滑らせた。

ビーバー 「あぶない!!」

プレーリー 「はっ!!」

プレーリーが、はしごの方へ上半身を下げ、右手ですばやく、ぼすのの左手をつかんだ。

プレーリー 「ぼすの！ 手をこっちへ！」 ※2

ぼすのが、プレーリーの方へ、右手を上げた。プレーリーは左手でそれをつかんだ。

そして、両手でばすのを引き上げた。

プレーリーとビーバーが、ベッドのふちに座り、ばすのが、テーブルのそばの椅子に座っていた。

プレーリー 「だいじょうぶツスカ？ けがとかしてないっスよね？」

ばすの 「……こわれた」

プレーリー&ビーバー ※3 「え？」

ばすのが、左腕を前に突き出すように持ち上げた。ひじより先（緑色の部分と、肌色の部分の境目あたり）に、ジグザグのひびが入っていた。そして、パキッと音がして、そこが割れて、ばたと、緑色の部分が垂れ下がった。

プレーリー&ビーバー 「わああー!!」

プレーリーとビーバーが、立ち上がってばすのに歩み寄った。

プレーリー 「うでがー!! ばすのうでがー!!」

ビーバー 「どうすれば……えっと、みせて」

ばすのの左腕の、折れ口は、ガサガサと荒れた感じの繊維質で、折れた木のようにだった。

ビーバー 「この子のからだ、木そのものツスね……」 ※4

ばすのが、左腕の、垂れ下がった部分を、右手でつかんだ。そして、腕の折れた部分を、もとの位置に戻した。みしつと音がした。

ビーバー 「痛くないツスカ?」

ばすの 「……わからない」 ※5

プレーリー 「なにか、動かないようにとめるものを……」

ビーバー 「穴をあけて、木の枝を差し込んでとめて、松やにでくつつけて……」

※6 でも、そんなこととしてほしいようぶツスカね……。ものすごく痛そうだし……。不安ツスね……」

ばすのが、左腕から右手を離れた。

ビーバー 「あれ?」

プレーリー 「くつついた?」

ばすのの腕の、折れた部分は、くつついたままだった。

プレーリー 「どうして? ……痛いかもしれないけど、ちよつと触るツスよ」

プレーリーは、ばすのの腕をさわって、傷口の状態を調べた。

プレーリー 「完全につながってる……」

ビーバー 「すごいであります! 自分で直したでありますか?」

ビーバーがばすのの顔を見た。

ばすの 「……わからない」

ビーバー 「わからないことだらけツスね……」

ビーバーの声と表情には、苦笑いと、不安がまじっていた。

ばすのが、テーブルの上に置いてあった、模型のホイールを見た。そして、それをつまんで、見つめた。

プレーリー 「わかるでありますか?」

ビーバー 「それだけ、残ったんスよ。この台が、ばすののうまれた場所……」

ビーバーは、テーブルに右手を置いた。

翌日の午後。 「3日目」

プレーリー 「そうそう、もうひといきであります!」

ばすのが、ログハウスのはしごを下りていた。その下では、プレーリーとビーバーが、ばすのを見守っていた。

ビーバー 「手は、さいごまでしっかりとつかんで、穴に落ちないように気をつけるツスよ」

ばすのが、地面におり立った。

プレーリー 「やった!」



ビーバー 「うまくできたツスね！ よくやったツス！」

プレーリー 「あとは、自分らがいなくても、ひとりでのぼりおりができるでありますな」

ビーバー 「いえ、もうしばらくは、いっしょに見てあげるツスよ……ごほうびに、ジャパリまん、食べるツスか？」

プレーリー 「ビーバーどのは、過保護であります……」

ばすの 「おかあさん、やさしい」

ビーバー 「へへへ……」

プレーリー 「デレデレであります……」

プレーリーの声と表情には、あきれと、微笑みがまじっていた。

さらに二日後の午後。「5日目」 ログハウスの二階。

ばすのが、椅子に座って、模型のホイールを、テーブルの上に、何度も転がして遊んでいた。ばすの手から放たれたホイールには、強い逆回転がかかっており、カカカツと音を立てながらテーブルの端ギリギリまで進むと、ヨーヨーのように戻り、再びばすの手に収まった。

プレーリー 「なんど見ても、ふしぎな動きであります……」

プレーリーは、ベッドのふちに座って、転がるホイールを見ていた。ベッドは二つに増えていた。

ビーバー 「ぼすのの特技ツスねえ」

ビーバーは、ぼすのの向かい側の椅子に座っていて、やわらかな表情で、ぼすのを見ていた。

プレーリー&ビーバー「あっ！」

模型のホイールが、テーブルの上から、丸太組みの床に落ちた。そして、丸太と丸太の隙間に入ってしまった。

ぼすのが、一瞬驚いた顔をした。そして、椅子から立ち上がり、しゃがんで、ホイールの落ちた隙間に、左手を突っ込んだ。

ビーバー 「さわると、下まで落ちちやうかも……。まずは、木の枝をすきまにいれて……」

ぼすのの手が、スライムのように変形して、丸太の隙間に入り込んだ。そして、ホイールを包み込み、左腕の中へ取り込んだ。ヘビが卵を飲み込むような動きだった。 ※7

ビーバー 「わあ……」

プレーリー 「また、新たな特技が！」

半透明の腕の中に見えていた、模型のホイールは、肌色の部分に移動して、見えなく

なった。

ばすのが、何かに気づいて、丸太の隙間から手を抜いた。そして、隙間の片側にあった丸太に、両手をあてて、目を閉じた。

ビーバー 「ばすの？」

プレーリー 「なにをしているでありませんか？」

ばすの 「ばすのの木」

プレーリー 「ばすのの、木？」

ビーバー 「これが？ ……まさか！」

プレーリー 「あの模型のもとになった木であります！」

ばすの 「死んでる」

間。

ばすのが、しゃがんだまま、テーブルのベースになっている、丸太の輪切りを見た。ビーバーが口を開き、なにかを言いかけた。

ばすのが、少し体をひねって、身を乗り出し、丸太の輪切りに両手をあてて、目を閉じた。

数秒経って、ばすのが目を開いた。

ばすの 「おかあさんの木」

プレーリーとビーバーが目を見開いた。

間。

ばすのが、一粒、涙をこぼした。

ビーバーが、椅子から立ち上がり、床に座って、ばすのに頭を下げた。

ビーバー 「ごめんなさい!! 申しわけないツス! オレっち、なんてこと……」

ビーバーも、ベッドから立ち上がり、床に座って、ばすのに頭を下げた。

プレーリー 「この木を切ったのは自分でありませぬ! 申しわけないであります

……。あやまつても、ゆるしてもらえないかもしれませぬが……」

ばすのが、プレーリーとビーバーの頭に、そつと手をふれた。

ビーバー 「うそ……」

ばすのが、プレーリーとビーバーの頭から手を離れた。ふたりが、顔を上げた。

プレーリー 「ゆるして、くれるでありますか?」

ばすの 「わるいこと、してない」

ばすのが、ほんの少し、笑顔になった。

プレーリー 「わらった……」

プレーリーは、目を見開いて驚いた。

ビーバーは、ばすのの顔を見ていられず、うつむいた。

ビーバー 「なんで、わらえるんスカ…… はじめての、笑顔……こんな、ときに……」

ビーバーの声は苦しげだった。泣いているようでもあった。

ビーバー 「怒って、ほしかったツス……。オレっち、おかあさんなんかじゃないツスよ……」

いつの間にか、ばすのの左腕の、緑色の部分の中に、模型のホイールがあった。それは、ゆっくりと手の方へ移動し、手のひらから外に出た。先ほどとは逆の動きだった。

ビーバーが、顔を上げた。

ばすのが、左の手のひらから出てきたホイールを、右手でつまんで、プレーリーに見せた。その動作は、マジックショーのようだった。

ばすのが、今度はビーバーにホイールを向けた。

ばすの 「おかあさんは、木と、あなた」

ビーバーが、感極まって、ばすのに抱きついた。

プレーリーが、ふたりをまとめて抱きしめた。

ビーバー 「この子のこと、もつとちゃんと調べたほうがいいツスね……」

ビーバーは、涙声だった。

プレーリー 「図書館へいくであります」

ビーバー 「……じゃあ、あした、三人いつしよに……」

プレーリー 「ビーバーどのは、ここを離れるのが不安なのでありますな」 ※8

ビーバー 「そんなこと、ないツス、よ？」

ばすの 「ここにいて」

プレーリー 「ビーバーどのは、お留守番であります」

翌日の朝。「6日目」 トンネルの出口付近（湖岸側）。

プレーリー 「では、いつてくるであります」

ビーバー 「ほんとうに、気をつけるツスよ……」

プレーリーとばすのが、手をつないで歩きだした。

一時間ほどあと。森の中の道。

ばすのは、歩くのがとても遅かった。

プレーリー 「ついてくるの、むずかしいでありますか？」

ばすの 「ごめんなさい」

プレーリー 「あやまることないであります。図書館へは、自分がひとりで行くであります。ばすのは、おうちに戻るであります」

プレーリーとぼすのは、いったんログハウスに戻り、プレーリーだけが、図書館へ向かった。

昼過ぎ。図書館。

ワシミミズク（じよしゆ）「その子は、おそらくフレنزズではないのです。もちろん、セルリアンでもないでしょう。フレنزズの模型、とでも言いましょうか……」

じよしゆは、言葉を濁した。

プレーリー「フレنزズの、模型？」

アフリカオオコノハズク（はかせ）「その子は、『模型のフレنزズ』ではなく、『フレنزズの模型』なのです。あるいは、『セルリアンの模型』かもしれないのです」

プレーリー「わからないであります……」

じよしゆ「でしようね。われわれにもはっきりとしたことはわからないのです」

はかせ「その子を見てみないことには、わからないのです」

じよしゆ「鳥の子に頼んで、その子をここまで連れてくればいいのです」

プレーリー「でも、あんまり乱暴にすると、ぼすのは怪我するであります」

じよしゆ「……過去に、似たようなことがなかったか、調べてみましょう」

はかせ「……なにかわかったら、こちらから行くです。その子を見てみたいの

です」

プレーリー 「かたじけないであります」

はかせ 「プレーリー、ひとつ忠告なのです。その子のことを、好きになりすぎる

と、痛い目にあうですよ。ビーバーにもそう伝えておくです」

プレーリー 「痛い目ってなんでありますか？ ばすのことは大好きであります

！」

じよしゆ 「手遅れ、なのですな」

つづく

※1 ばすのは、はしごより、土の壁（段付き）を登るほうが得意です。

※2 プレーリー本人は意識していませんが、ばすのに対して、「どの」とつけずに、呼び捨てにしており、「であります」とも言っています。自然にこうなったようです。

※3 「プレーリー&ビーバー」って、響きが音楽ユニット（デュオ）っぽい、と、しよ



うもないことを思いました。

※4 ばすのの体は、外側から見ると、(緑色の部分以外は)ヒトのような肌色で、やわらかいのですが、内部は硬い木のような繊維質で、矛盾しています。関節も、外見上はヒトと同じです。ばすのは、矛盾を抱えた存在なのです。

※5 ばすのは、「傷み」が正確には理解できていません。傷みを感じているのか、いないのかは、本人にもわからないようです。

※6 ダボ継ぎです。これで割れた部分をぴったり合わせるのは難しいと思うのですが、プレーリーとビーバーならでできるのではないかと。

※7 模型のホイールの直径は、60mmくらいあり、結構大きいです。ばすのの手首は細いので、ホイールを腕に取り込む、または取り出すときは、ふくらみます。

※8 雨が多い季節なので、ダムと湖のことが心配なのです。

#### 次回予告

ばすの 「いっしょに」

ばすの 「あやまつちやだめ」

ばすの 「ここがいい」

ばすの 「なんとなく」

ばすの 「にげて」  
次回 第3話 『水と土』

## 第3話 水と土

プレーリーが図書館に行っているころ。湖のログハウスの二階。

ビーバーが、ベランダから湖を見下ろしていた。湖の水位が下がっていて、岸に、水位が高かった時の跡が残っていた。ビーバーが室内へ戻り、椅子に座っていたばすのに声をかけた。

ビーバー 「オレっち、ちよいと、ダムの様子を見てくるツス」

ビーバーがはしごを下りようとすると、ビーバーの服が何かに引つ張られた。ビーバーが斜めうしろを見ると、ばすのが、ビーバーの服の裾をつかんでいた。

ビーバー 「ばすの。湖の水が減っているんすよ。ダムの穴をふさがないと……」

※1

ばすの 「いっしょに」

ビーバー 「そんな、あぶないツスよ」

ばすのは、じっと、上目づかいで、きよとんとした表情で、ビーバーを見ていた。

ビーバー 「……ばすのは、およげるんすか？」

ビーバーの頭に、ばすのと出会った時の映像が思い浮かんだ。ばすのが、ぷかぷかと、水に浮かんで、ゆっくりと流されていく……。

ビーバーとばすのは、手をつないで、湖の岸を歩いて、ダムへ向かった。

ビーバー 「ここでちよつと休憩ツス」

ログハウスからダムまでは、それほど離れてはいなかったが、ばすのは歩くのが遅いため、移動には時間がかかった。

ビーバー 「よくがんばったツスね」

ふたりは、ダムの端にたどり着いた。

ビーバー 「オレっちは、泳いでダムの穴をふさいでくるから、ばすのは、ここで待つツスよ」

ビーバーが、水に入っていこうとした。ばすのが、ビーバーの腰に後ろから抱き着いた。

ばすの 「いっしょに」

ビーバーが振り返った。

ビーバー 「だめツスよ」

ばすのが、少し悲しげな表情になった。

ビーバー 「……浮くだけなら、できるツスよね?」

ビーバーとぼすのは、お互いの腰を木のつるで繋いで、湖へ入っていった。ビーバーがぼすのを引つ張る形になった。ぼすのは、立ち泳ぎの姿勢で浮かび、両手でつるをつかんで、引つ張られていった。

ふたりは、ダム放水口にたどり着いた。

ぼすのは、ぼんやりと、たくさんの木と木の枝で作られた、ダムを見つめていた。ぼすのは、足で水をかいて、ゆっくりと泳ぎ、ダムの木の一本に、両手をあてて、目を閉じた。その様子を見て、ビーバーの表情が曇った。

ビーバー 「ぼすの……」

ぼすのが、ビーバーを見た。

ぼすの 「あやまつちやだめ」

ビーバーがうつむいた。

ビーバー 「せめて、あやまらせてほしいツス……」

ぼすの 「わるいこと、してない」

ビーバーは、放水口のわきに置いてあった木材を使って、放水口をふさいだ。

帰りは、ビーバーがぼすのを引つ張って泳いだため、早かった。

夕方。ログハウスの二階。

ビーバーとぼすのが、ベッドのふちに隣り合って座っていた。ぼすのは、ビーバーにもたれかかっていた。ビーバーが、ぼすの顔を見て、それにこたえるように、ぼすの顔もビーバーの顔を見た。至近距離で見つめ合うふたり。そこへ、プレーリーが、はしごを登って現れた。

プレーリー 「ただいまであります！」

ビーバーがビクツとなった。

ビーバー 「お、おかえりなさいッス……」

ビーバーは、慌てて、もたれかかっていたぼすのを離そうとした。

プレーリー 「なんで驚くでありますか？」

プレーリーが、はしごを登りきった。

ビーバー 「なんでもないッスよ……。ほら、ぼすの、こういうときは、おかえりなさいって」

ぼすのが立ち上がり、ビーバーに歩み寄った。そして、少し背伸びをして、目を閉じて、キスをした。プレーリーは、ぼすのを抱きしめた。

ビーバー 「なにやってるんスか!？」

プレーリーが、こくん、と、何かを飲み込んだ。

ふたりの唇が離れた。プレーリーが、ビーバーを見た。

プレーリー 「あいさつであります」

ビーバー 「そういうことは、オレっちと……」

ばすのが、ビーバーを見た。

ビーバー 「え？」

ばすのが、プレーリーから離れて、ビーバーに歩み寄った。そして、少しかがんで、ビーバーに顔を近づけていった。

ビーバー 「ばすの、そういう意味じゃないツスよ！」

ばすのが、ビーバーにキスをした。そして、ビーバーを抱きしめた。ビーバーが、くん、くんと何かを飲んでいった。ふたりの唇が離れた。

ビーバー 「やつぱりこれ、おいしいツスね……。ありがとう、ばすの」

ビーバーが微笑んだ。

次の瞬間、ばすのが、ふらりと、倒れかかった。

ビーバー 「だいじょうぶツスか!？」

プレーリー 「ねむいみたいであります」

ばすのは、眠そうな顔だった。

ビーバー 「きょうはたくさん歩いて、つかれちゃったツスね。すぐ寝ちやうとい

いッスよ」

夜。ばすのがベッドで眠っていた。プレーリーとビーバーが、テーブルに向かい合って座っていた。ふたりは、小声で会話していた。

ビーバー 「痛い目にあう？」

プレーリー 「はかせにそう言われたであります……」

ビーバー 「こわいこと言うッスね……。でも、好きになるな、なんて……。はじめから、模型だったときから、ばすのこと、好きだったから、むりッスよ……」 ※2

プレーリー 「それは、自分もおなじであります」

ビーバー 「痛い目って、変なこといろいろ考えちゃうッスよ……。ものすごく不安ッスね……」

プレーリー 「へんな、こと？ ……好き……痛い………よくわからないでありますー!!」

プレーリーは、泣き叫ぶように言って、頭を抱えた。

ビーバー 「声が大きいッスよ！ 考えたくないッスよね……。そんなふうにはさせないッスよ」

ふたりが、ベッドに寝ているばすのを見た。ばすのは、すやすやと眠っているように



見えた。

翌日の朝。「7日目」 ログハウスの二階。

ビーバーが、ペランダから湖を見下ろしていた。湖の水位は、昨日より少し上がっていた。ばすのは、ベッドで眠っていた。ビーバーが室内へ戻り、椅子に座っていたプレーリーに話しかけた。

ビーバー 「いまの季節は雨が多くて、ダム調整がむずかしいツス……。水が増えすぎると、穴に水が流れ込んでしまうかも……。不安ツスね……。」※3

プレーリー 「穴のまわりに、土を盛ってみたらどうでしょうか？」

ビーバー 「いいツスね。土を木の枝でかためる、とか、ちよつと考えてみるツス」 ログハウスの下の、トンネルの入り口のまわりに、土を盛る作業が始まった。以前と同じく、ビーバーが設計と指示、プレーリーが実作業を行う形になった。

ビーバーが穴の外にいて、未完成の、盛り土の状態を見ていた。そこへ、ばすのがはしごを下りてきた。ビーバーが頭を上げて、ばすのを見た。

ビーバー 「ばすの、まだ寝てていいツスよ」

ばすのが、縦穴の中へ下りていった。

ビーバー 「そっちは工事中だから入っちゃだめツスよ！」

ばすのを追って、ビーバーも縦穴へ入った。

トンネルの途中には、横にのびる部屋があった。その部屋の向かい側の壁を、プリーが掘っていた。そこへ、ばすのとビーバーがやってきた。

プリーリー 「ばすの！ おはようであります！」

ばすのは、プリーリーの作業を興味深そうに見ていた。

ビーバー 「いまは、お部屋を増やしてるツス。ここで出た土を、むこうの入り口のまわりに盛って、穴に水が入ってくるのを防ぐツス」

ばすのが、プリーリーが掘っていた壁にふれた。そして、上から下へ、手をすべらせた。ばすのがしやがんで、壁の一番下まで手を滑らせると、立ち上がり、壁の高い所に、ずぼっと、手を深く突っ込んだ。

ビーバー 「なにしてるツスか？」

ばすの 「ここがいい」

プリーリー&ビーバー 「ここ？」

ばすのが、壁から、ずぼっと手を引き抜いた。

ビーバー 「わあっ！ なんですか、それ？」

ばすのの手のまわりには、土のかたまりが出来ていた。

プリーリー 「くつついている、でありますか？」

プレーリーが、土のかたまりに指を突っ込んだ。

プレーリー 「これ、粘土であります…。きもちいいやわかさ、でも、しっかりしているであります」

ビーバー 「盛り土にちょうどいいツスね。掘れば、もつと出てくるかも」

ばすのは、手についた粘土を床に落とした。

ばすの 「このあたり」

ばすのは、トンネルの壁の、高い所を、横向きになでた。

プレーリー 「ここ掘れ、でありますな！」

プレーリーが、ばすのがなでたあたりの、土を掘っていった。

プレーリー 「おおお！ この感触！ 粘土のかたまりであります！」

ビーバーが掘った先には、他とは色の違う土の層があった。

ビーバー 「これ、粘土の層ツスよ！ どうしてわかったんすか？ ばすの？」

ばすの 「なんとなく」

プレーリーとビーバーは、ばすのが発見した粘土の層から、粘土を地上へと運び、口グハウスの下の、トンネルの入り口のまわりに盛っていった。ばすのは、粘土のある場所を的確に指示していった。

ばすのが、粘土を片手にくつつけて、トンネルから出てきた。それを、ビーバーが迎

えた。

ビーバー 「ぼすのおかげで、いいものができそうツスよ」

ビーバーは、ぼすの頭をなでた。

午後。

盛り土は、完成目前だった。トンネルの中には、プレーリーとぼすのがいた。粘土を掘り出すプレーリーを、ぼすが見守っていた。

突然、ぼすのがプレーリーに言った。

ぼすの 「もう取っちゃだめ」

プレーリー 「取っちゃだめ？」

プレーリーが、掘っていた勢いで、壁に手を突っ込んだ。突っ込んだ所から、泥水が噴き出した。プレーリーが泥水をあびた。

プレーリー 「みずがー!! どころがー!!」

外にいたビーバーが、慌てた様子でトンネルに入ってきた。

ビーバー 「ふたりとも!! はやくにげるツスよ!!」

ぼすのが、噴き出す泥水に右手をかぎした。

プレーリー 「なにしてるでありますか!?! にげるであります!!」

プレーリーが、ばすのの左手を引いたが、ばすのはその場から動かなかった。

ビーバー 「ばすの!! トンネルから出るツス!!」

ばすのの手が、倍ほどに広がり、噴き出す泥水をおさえた。そして、ばすのは、泥水を押し戻しながら歩き、泥水を噴き出していた穴を、手でふさいだ。勢いは弱まったが、なおも、泥水は漏れ出してきた。

ばすの 「にげて」

ビーバー 「ばすの!! むちやしないで!!」

プレーリー 「いっしょににげるであります!!」

プレーリーが、ばすのの左腕を強く引いた。ばすのの左腕が、以前折れたあたりで、ちぎれた。

プレーリー&ビーバー 「わあああー!!」

泥水の勢いが弱まっていき、出水が止まった。ばすのが、壁から手を離すと、穴がふさがっていた。

プレーリー 「またやってしまったであります……」

プレーリーがひざをついた。その手には、ちぎれた、ばすのの左腕があった。

ビーバー 「プレーリーさん! ばすののうでを、もとに戻して!」

プレーリー 「はっ!」

プレーリーは、ばすのの左腕を、もとの位置にくつつけた。プレーリーが、ばすのの腕から手を離れたが、腕はくつついたままだった。ビーバーが、出水したあたりを見た。ビーバー 「まだあぶないかも……いったん外に出るツスよ」

ばすのの動きは遅く、ふらついていた。プレーリーとビーバーが、ばすのを両脇から支えた。三人は、ログハウス側の縦穴から、地上へと出た。そして、草地に座り込んだ。

ビーバー 「はあ、はあ、ばすの、うでをみせて」

ビーバーが、ばすのの腕の、ちぎれたあたりをさわった。

ビーバー 「まだ、完全にはつながってないツスね……。しばらく、そえ木で固定しないと。ここ、もろくなってるのかも……。不安ツスね……。手は動くツスか？」

ばすのは、左手を握ったり開いたりした。

ビーバー 「よかった……」

ビーバーが、ばすのの左腕をみていたとき、プレーリーは、ばすのの右手を見た。

プレーリー 「その手、だいじょうぶでありますか？」

ばすのの右手は、もとの大きさに戻っていたが、緑色だった部分が、土色ににごって  
いた。

ばすの 「まぎった……」

ばすのが、目を閉じて、倒れた。

ビーバー 「ぼすの!!」

プレーリー 「どうしたであります……」

ぼすのの姿が、一瞬で消えた。

プレーリーとビーバーは絶句した。

ぼすのが倒れた場所には、泥水にまみれた、ジャパリバスの模型があった。

つづく

※1 雨がが多い季節なので、前回の大雨のあとは、放水口を大きくしたままにしてみました。

※2 自分が手間と時間をかけて作ったものには、思い入れができるものです。時には、自分の命を削って、作品にこめてしまうこともあります。

※3 アニメを見ると、ログハウス側のトンネルの入り口は、かなり低い場所にあります。それなので、湖が増水すると、トンネルが浸水してしまいそうです。

次回予告

はかせ 「調べるのです。あきらめないのです」

はかせ 「そんなことしたら、からだがこわれてしまうのです!!」

はかせ 「„いのちの模型”、なのです」

はかせ 「見てもらえないのです」

はかせ 「あのふたりはおろか者なのです」

次回 第4話 『戻る』



## 第4話 戻る

ログハウスの二階。

ビーバーが、バスの模型のトラクター（運転席）をテーブルに置いた。プレーリーは、模型の客車をテーブルに置いた。ビーバーが、トラクターと客車を連結させた。

プレーリーとビーバーは、バスの模型を、じっと見つめた。うなだれた、ふたりの表情は見えなかった。

間。

突然、テーブルの上に、強い閃光が発生し、ボタン、と、テーブルの天板が外れて落ちた。

プレーリー 「模型が!!」

ビーバー 「ぼすの!?!」

床に、ぼすのが倒れていた。

プレーリー 「戻ってきてくれたであります!」

プレーリーは、うれしそうだった。ビーバーは、不安そうな顔で、しゃがんで、ぼすのの肩をたたいた。

ビーバー 「ぼすの！ おきてー！」

プレーリー 「ぼすのはつかれているであります。寝かせておいてあげるであります」

プレーリーとビーバーは、協力してぼすのを持ち上げ、ベッドに寝かせた。

夕方。ログハウスの二階。

ぼすのが目を覚ました。

ベッドのそばに、プレーリーとビーバーがいた。ふたりは、椅子に座って、ぼすのを見守っていた。

プレーリー 「おきたであります！」

ビーバー 「よかった……心配したツスよ」

ぼすのは、プレーリーとビーバーを、きよとんとした顔で、見つめた。

プレーリー 「……自分たちのこと、おぼえているでありますか？」

ビーバーが驚いて、プレーリーを見た。そして、すぐに不安そうな顔になった。

ビーバー 「プレーリーさん、なにを言ってるんすか……」

ぼすのが、ゆつくりと右腕を上げて、プレーリーの頬に触れた。腕の緑色の部分は、土色が混ざったままだった。

ばすのが、かすかに笑った。

ビーバー 「ほら、ちゃんとおぼえているツスよ。ねえ、ばすの」

ばすのが、ビーバーを見た。ばすのの口が開き、かすかに動いた。

ばすの 「……………」

ビーバー 「ばすの？」

ばすのが、少し苦しそうな顔で、声を絞り出した。

ばすの 「……………かー、さ………っ」

ばすのの声は、小さく、ひどくかすれていた。

プレーリー 「この子、声が！」

ビーバー 「そんな！ どうして……………」

ばすのが、プレーリーとビーバーから、目をそらした。

ビーバー 「ばすの、のどが痛いツスか？ 息がくるしいツスか？ からだのどこ

かに、痛いところは？ くらくらする、とか、からだがあつい、とか……………調子がわるい

ところがあつたら……………」

ばすのは、目を丸くして、ビーバーを見つめた。

プレーリー 「ビーバーどの、ばすのがとまどっているであります」

プレーリーは、ばすのの頭を、やさしくなでた。

プレーリー 「もうすぐ、はかせたちが、きてくれるであります」

ビーバー 「あした、こないようなら、こちらから図書館にいくツス。プレーリーさん、また、おねがいます」

プレーリー 「まかせるであります！」

夜。図書館。

机に、何冊もの本が積んであった。はかせとじよしゆが、その中の一冊を見ていた。

じよしゆ 「似ていますね」

じよしゆが、本のページをめくった。それは、大判の分厚い本だった。そのページには、数十行の文章があり、木の椅子の写真があった。その椅子は、四本ある足のうち、一本が折れていた。じよしゆが、ページをめくると、今度は、割れた、木のお椀の写真があった。さらにページをめくると、木彫りの人形の写真があった。それは、子供用のおもちゃらしく、頭が大きかった。そして、片方の足に包帯が巻かれていた。

はかせ 「この本は、信用できないのです……」

はかせは、暗い表情だった。

じよしゆ 「少し休みますか？ はかせ」

はかせ 「調べるのです。あきらめないのです」

はかせが、別の本を手に取り、パラパラとページをめくった。こちらは、手書きのノートだった。 ※1 そのノートは、たくさんの紙や付せんが挟まっていて、膨らんでいた。

はかせの手が、あるページで止まった。はかせが、一瞬目を見開き、目を閉じて、ノートから、顔をそらした。じよしゆが、はかせが見ていたノートに目をやった。

じよしゆ 「……あの子たちのことも、ちゃんと記録されていたんですね」

じよしゆが顔を上げて、図書館の外を見た。

じよしゆ 「……だれか来ますね。わたり鳥の子、でしょうか？」

はかせ 「こんな時間に、なんの用なのですか？ こっちはいそがしいのです」

ひゆん、ひゆん、と、鳥のフレンズ特有の、羽音が聞こえてきた。

翌朝。「8日目」 ログハウスの二階。

ばすのとビーバーが、同じベッドで、横になっていた。隣のベッドにはプレーリーが寝ていた。ばすのを真ん中にして、三人は、川の字になっていた。ビーバーは起きていて、ばすのの顔を見つめていた。

ばすのが、目を覚ました。

ビーバー 「おはよう、ばすの」

ばすのが、ビーバーの目をじっと見つめた。ばすのは無表情だった。間。

隣のベッドに寝ていたプレーリーが、目を覚まし、ばすのを見た。

プレーリー「おはようであります……」

ばすのが、プレーリーを見た。ばすのは、無表情だった。

プレーリー「ばすの、調子はどうでありますか？」

ばすのは、無表情だった。

一時間ほどあと。

ばすのは、ベッドに横になったままだった。プレーリーとビーバーは、ベッドのそばの椅子に座っていた。ばすのは、無表情で、ふたりを見つめるだけだった。

プレーリー「ばすの、ジャパリまん、食べるでありますか？」

プレーリーの声は優しくかった。ばすのが、ゆっくりと上体をおこした。プレーリーが立ち上がって、テーブルの上に置いてあった、ジャパリまんを一つ取ってきた。プレーリーは、それを二つに割って、半分をばすのに渡した。ばすのは、ゆっくりとした動きで、それを受け取った。そして、それを数秒見つめたあと、ほんの少しかじった。

プレーリーが、残りの半分をさらに半分に割って、ひとかけらをビーバーに渡した。

三人は、なにも言わず、ジャパリまんを食べた。突然、ばすのが、ジャパリまんを落として、ベッドに倒れた。

ビーバー 「ばすの！」

プレーリー 「どうしたでありますか!？」

ばすのは、首を少しだけ動かし、目線を、ぼんやりと、プレーリーとビーバーに向けた。

ビーバー 「えっと、ジャパリまんが、そうじゃなくて！ ばすのが、ばすのと、あれ、どうしよう！ どうしたらいいんスカ……」

ビーバーは ひどく取り乱していた。

プレーリー 「ビーバーどの！ しっかりするであります！」

ビーバー 「……ばすの、体は、動かせるツスカ？ 痛い所は？」

ばすのは、ほんの少し、首を横に振った。ビーバーが、ばすのの手をつかんで、握った。ばすのの指が、少しだけ動いた。ビーバーは、ばすのの手をつかんで、腕をゆつくりと持ち上げた。ばすのの腕には、全く力が入っておらず、持ち上がったひじが、力なく揺れた。

ビーバー 「重症ツスね……助けをよばないと」

プレーリー 「だれかよんでくるであります！」

プレーリーが、階下へ飛び降りた。

はかせ 「プレーリー、戻ってくるのです」

ビーバー 「はかせ！」

はかせとじよしゆが、ログハウスの二階に飛んできた。

プレーリーが、二段飛ばしで、はしごを登ってきた。

プレーリー 「おそいであります！」

じよしゆ 「その子は、うごけないのですか？」

ビーバー 「ええ、さつきまで、うごけてたんですけど……。きのう、一度、模型に

戻って、そのあと、しゃべれなくなつて……」

ビーバーは、泣きそうな声だった。

はかせ 「予想よりも早いのです」

はかせとじよしゆが、ベッドに寝ているばすのに近づき、見つめた。

プレーリー 「お願いであります！ この子を、ばすのを助けてほしいであります！」

はかせ 「残念ながら、助ける方法はないのです」

じよしゆ 「近いうちに、この子は、もとのすがたに戻るでしょう」

ビーバー 「そんな……もう、おはなしできない、うごかない……つてことツスカ？

なにか、今のすがたでいられる方法があるはずツスよ……」



はかせ 「ないのです」

プレーリー 「ひどいであります……」

じよしゆ 「この子に、はげしい運動などをさせましたか？」

ビーバー 「おととい、むこうのダムまで歩いて、きのう、トンネルの出口に、土を盛る作業を手伝ってもらって……」

はかせ 「むりしすぎなのです……。植物は、うごけないのです……」

はかせがうつむいた。その声は、いつもと違って、暗く、重かった。

じよしゆ 「ほかには？ それだけではないでしょう？」

プレーリー 「きのう、トンネルのなかで、水もれがあつて……。ばすのが、すごい力を使って、水を止めたであります……」

はかせが顔を上げた。

はかせ 「そんなことしたら、からだがかわれてしまうのです!!」 ※2

プレーリーとビーバーが、驚いて目を見開いた。

プレーリー 「……自分らの、せいであります……」

じよしゆ 「元のすがたに戻つてしまうのは、どうやっても避けられないのです。記録によれば、持つても三週間ほど。はげしい運動をさせると、それが短くなるのです。

この状態だと、おそらく……三日ももたないでしょう」

ビーバー

「早すぎるツスよ！ まだ、生まれたばかりなのに！」

はかせ

「過去にも、似たような子がいたのです……。その子たちに共通するの

は、

もとが、木を加工したものであること、

フレンズが愛着をもったものであること、

それらが、なんらかの形でこわれたこと、

そして、それらが水にぬれて、そこにサンドスターがあたったこと、

なのです」

はかせ

「ただ、例外も多く、記録の多くは、つくられたものである可能性が高い

のです。それらは、ヒトのすがたになり、時間がたつと、サンドスターが失われるか、生

命力がなくなるかして、ヒトのすがたを保てなくなるのです」 ※3

はかせ

「……そもそも、この子は……。もう、死んでいるのです……」

プレーリー

「死んでる!？」

ビーバー

「そんなはずないツスよ!!」

じよしゆ

「材料の木を切り倒し、その木が再生できなくなった時点で、この子は死ん

だのです」

ビーバー

「木が硬くなる、あのかんじツスね……。オレつちが……。ばすのを……」

殺したんだ」

プレーリー 「ちがうであります!! ビーバーどのは、ばすのを生み出したであります!!」

はかせ 「殺したのも、生み出したのも、どちらも正しいのです。この子は、生きているふりをしているだけなのです。『いのちの模型』、なのです。こういった現象がおきるには、長い時間がかかるものなのですが、この子の場合、木を切り倒した本人たちが、はじめから、模型として作ったので、こうなるのも早かったです」

はかせの声のトーンが少し変わった。

はかせ 「そして、おそらく、もとに戻るのも、早いのです」

ビーバー 「……………ジャパリまんを食べさせるとか、サンドスターをあげれば……………」

じよしゆ 「食事を与えても、少し、もとに戻るのを遅らせるだけなのです」

プレーリー 「……………いっしょにいられる時間を、ふやせるでありますな」

プレーリーが、ベッドに落ちていたジャパリまんを拾った。

プレーリーは、しゃがんで、ジャパリまんを一口かじった。そして、ばすのと、口を合わせた。

少し経って、プレーリーは、口を離した。体をおこしたプレーリーは、ふらりと、倒

れそうになった。

ビーバー 「プレーリーさん！」

ばすのが、プレーリーを見つめて、口を開いた。

ばすの 「……おとーさ……」

プレーリー 「やった！」

じよしゆ 「あなた、まさか！」

ビーバー 「プレーリーさん、ジャパリまんを」

プレーリー 「むりをして、フレンズ化が解けたら意味ないでありますよ」

プレーリーは、ビーバーを見て笑った。プレーリーが、ジャパリまんを、ビーバーに渡した。

ビーバー 「ギリギリで、持ちこたえてみせるツス」

ビーバーは、プレーリーに笑い返した。

ビーバーが、ジャパリまんを一口かじった。

はかせ 「やめるです！ それは、わるあがきなのです。意味がないのです」

ビーバーが、ばすのと口を合わせた。少し経って、ビーバーは、口を離した。そして、ばすのの胸の上に、倒れ込んだ。

ばすのが、首をおこして、ビーバーを見た。そして、腕を上げて、ビーバーの頭に触

れた。

ばすの 「おかーさん……」

ビーバー 「うう、ぐす、ばすの……」

ビーバーは、肩を震わせていた。

プレーリー 「もう一回であります！ ばすの！」

じよしゆ 「これは、言ってもきかないでしょうね」

はかせが、ベッドに背を向けて、ベランダへ歩いていった。

じよしゆ 「はかせ？」

はかせは、ベランダから外へ飛んだ。じよしゆが、はかせを追った。

じよしゆ 「どうしたのですか？ はかせ」

はかせ 「見ていられないのです」

湖の岸。

はかせとじよしゆは、岸に立って、ログハウスを見ていた。

はかせ 「あのふたりはおろか者なのです。あんなことをしても、よけいにつら

くなるだけな

のです」

じよしゆ  
はかせ  
のですか？

じよしゆ  
を考えて

はかせ  
してあげる

じよしゆ  
はかせ

つづく

「それは、われわれがおろか者だと言っているようなものでは？」

「あのときはおろか者だったのです。……なぜそんなに冷静でいられる  
じよしゆ」

「冷静ではないのです。あの三人がうらやましい、なんて、おかしなこと  
いるのですから」

「それが冷静だというのです。……もう少しだけ、あの三人に知恵をか  
のです」

「よけいにつらくなる、のではないんですか？」

「わかっているのです」

※1 パークの職員（飼育員）たちが残した、膨大な数のノートの中の一冊です。パークで起きた出来事や、研究内容などが書かれています。このノートには、複数の職員が書き込んでおり、職員たちの日記のような役割も果たしていました。中には印刷物が挟んであったり、写真や図が貼り付けてあったりします。重要な所には、付せんがついています。時には、フレンズが、簡単な文字や絵を書き込むこともあったようです。ページのふちが、少し茶色く変色しています。

※2 はかせが珍しく感情的です。

※3 つくもがみ（動物ではなく器物）に近いですが、少し違います。

#### 次回予告

ビーバー 「だめっスよ!! ばすの! こたえなくていいツスから!!」

はかせ 「どちらかを選ぶです」

ばすの 「いつしよにいたい」

ビーバー 「なんでわるいことが重なっちゃうんスカね……」

プレーリー 「好きに、させてあげられます……」

じよしゆ 「警戒地域をふやしますか?」

次回  
第5話  
『選択』



## 第5話 選択

ログハウスの二階。

プレーリー 「ほんとうに、ギリギリだったでありますな……」

プレーリーは、疲れた様子で、ぼすの隣のベッドに横になっていた。

ビーバー 「ちがう世界が見えたツスよ……」

ビーバーと、ぼすのは、抱き合って、ベッドに横になっていた。ビーバーが、ぼすの頭をなでると、ぼすのが微笑んだ。

プレーリー 「そっち、うらやましいであります！」

プレーリーが、隣のベッドに転がり込んで、ぼすのに抱きついた。ぼすのは、ビーバーとプレーリーに挟まれる恰好になった。

ぼすの 「あつい」

はかせ 「やれやれ、なのです」

じよしゆ 「暑苦しいのです」 ※ー

はかせとじよしゆが、戻ってきた。

ビーバー 「ふたりとも、どこへ行っていたんですか？」

はかせ 「それをきくのは野暮、というものなのです」

じよしゆ 「気をきかせてあげたのです」

プレーリー 「かたじけないであります」

ばすの 「あついで」

ばすのが、ばたばたともがいた。

じよしゆ 「おどろくほど回復していますね」

はかせ 「ふたりとも、やりすぎなのです。ほんとうにフレンズ化が解けてしま

うのです」

ビーバー 「ちよつと、むちやしちやつたツスね……」

はかせ 「ちよつとじゃないのです。あなたたちふたりがいなくなったら、ばす

のはどうなるのですか？」

プレーリー 「そのときは……はかせたちにまかせるであります！」

ビーバー 「あれ？ いま、ばすの、って言ったツスか？」

じよしゆ 「あなたたちは、ほんとうに、おろか者なのです」

助手の声は、いつもの少し冷たい感じだったが、その中に、あきれが混じっていた。

はかせ 「そんなおろか者のふたりに、おしえてあげるです……ばすのが、もう少

しだけ、いまのすがたでいられる方法を」

プレーリー 「そんな方法があるではありませんか!？」

じよしゆ 「このやりかたには、大きなリスクがともなうのです。それでもよろしいですか？」

ビーバー 「ぜひ、おしえてください! ……リスク?」

プレーリー 「リスクって、なんでありませうか?」

はかせ 「うまくいくかは、半々……以下なのです。逆に、早く戻ってしまいかもしれないのです。仮に延命できたとしても、ばすのを苦しめるかもしれないのです」

ビーバー 「苦しめるって、なにがおきるんですか……」

はかせ 「そのままの意味なのです。…その方法は、流れに逆らって、むりやりヒトのすがたを保つのです。もとに戻ろうとする部分と、ヒトのままにいようとする部分と、ばすの中で混ざるのです。バランスが崩れて、痛みが生じるかもしれないのです。ここからからだ、両方にです」

ビーバー 「……………」

プレーリー 「それでも、それでもももつと、ばすのといっしょにいたいであります!」

ビーバー 「……プレーリーさん、やめときましよう……」

ビーバーが、ばすのを強く抱きしめた。

プレーリー 「ビーバーどの! なにを言っているでありますか!？」

ビーバー 「そんなの、ばすのがかわいそうツスよ……」

じよしゆ 「本人にきいてみたらどうですか？」

プレーリー 「……ばすのは……痛くても、苦しくても……」

ビーバー 「だめっスよ!! ばすの! こたえなくていいツスから!!」

ばすの 「いっしょにいたい」

ビーバー 「ばすの……反対できないツスよ……」

じよしゆ 「はかせ、方法だけ教えましょう。まだ、もう少し時間があるのです。プ

レーリーとビーバーが回復するころには、どうするのか、三人で、答えをだすです」

はかせ 「……………一番大事なことは、親との接触をふやすことと、サンドスター

を補給することなのです」

じよしゆ 「これは、言わなくてもすでにやっていますね」

プレーリー 「それだけでいいではありませんか？」

はかせ 「まだあるのです。ばすのは、植物としての性質と、模型としての性質、

バスとしての性質の、三つを持っているのです。バスとしての性質は弱

いので、

除外しましょう」

はかせ 「植物としての性質を優先するならば、水分を多くとり、日当たりのいい

場所で過ご

すこと。水に浸かってもいいのです。

模型としての性質を優先するならば、水分を避けて、風通しの良い、乾いた場所で

過ごすこと。そして、温度の変化も避けるのです。この場合は、あまり

日にあたら

ないほうがいいのです」

ビーバー 「それ、逆ですよ……」

はかせ 「どちらかを選ぶです。まちがえれば、逆効果になるのです」

ビーバー 「なにそれ……こわいッスよ……」

プレーリー 「そんなの選べないであります……」

じよしゆ 「どちらを選んでも、別れが近い、というのは変わりません。すこし早いか、遅いかだけなのです」

ビーバー 「もうひとつ、選べるものがほしいッス……。ばすのと、ずっといつしよにいられるものを。むりだって、わかっているんすけど……」

プレーリー 「自分も、ほしいであります!!」

はかせ 「模型のすがたでなら、いつしよにいられるのです。……どうやっても、

いまのままでは、いられないのです」

ビーバー 「……なにもしないで、自然にまかせる、というのも、ありッスね……」  
はかせ 「今までの感じだと、おそらく、植物としての性質が強いので、リスクは

ありますが、そちらを選ぶのが、正解かもしれないのです」

はかせとじよしゆが、ベッドから少し離れて、小声で話しを始めた。

じよしゆ 「図書館へ戻りましょう、はかせ」

はかせ 「……もう少し、この三人を見ていてあげるので」

じよしゆ 「例の雲の件で、そろそろ知らせがくるのではないですか？」 ※2

はかせ 「あれはまだ直撃するかわからないのです。……見ているのがつらいのですか

? じよしゆ」

じよしゆ 「……ほんとうに、あの雲はあぶないかもしれないのです。情報を

集めて、あぶないようであれば、島の皆に伝えましょう」

はかせ 「しかたないのです」

プレーリーが、じよしゆを見た。

プレーリー 「あのくも、つてなんでありますか?」

じよしゆ 「なんのことでしょう?」

はかせ 「じよしゆ、隠すような話ではないのです。…おまえたちには先に伝え

ておくです。

近いうちに、この島に嵐がくるかもしれないのです。

鳥の子たちが、南西の海で、大きな雨雲を見たと言っているのです。風

がものすご

く強くて、近寄れなかった、とか……。 ※3 その雲は、おそらくこの

島へ向かって

いるのです。この家は頑丈そうですが、逃げることも考えておくです

よ

プレーリー 「こわいであります……」

ビーバー 「なんでわるいことが重なっちゃうんスカね……」

じよしゆ 「われわれは、いったん図書館に戻るのです」 ※4

はかせとじよしゆが、ログハウスから去っていった。

翌日の夕方。 「9日目」

プレーリーとビーバーは、回復し、普段通りに活動できるようになった。

プレーリー 「そろそろ、決めないといけないであります……」

プレーリーとビーバー、そして、ばすのは、決断を迫られた。考えられる選択肢は、三

つ。

ばすのの、植物としての性質を優先し、延命策をとる。  
 ばすのの、模型としての性質を優先し、延命策をとる。

延命策をとらず、自然にまかせる。

ビーバー 「あのふたり、むちやくちやなこと言うツスよ……知らなきやよかつた……」

ビーバーは、頭を抱えた。

ビーバー 「どうすればいい……。なにが正解なんスカ……」

プレーリー 「わからない、こんなの選べないであります！」

ばすの 「えらばなくていい」

ビーバー 「ばすの……でも、いっしょにいたいんじや……」

ばすの 「つらいなら、えらばなくていい」

プレーリー 「ばすのは、やさしいでありますな」

ビーバー 「ほんとうに、いい子ツスよね」

ビーバーは、ばすのの頭をなでた。

ビーバー 「でも、選ばないって、なにをすればいいんスカね？ 自然にまかせる、のと同じなんスカね？」



プレーリー 「考える必要なんて、ないでありますよ！」

翌日。「10日目」

ログハウスのわきの、小高い場所。

プレーリーと、ビーバーと、ばすのは、草地に座っていた。

ばすのは、半分のジャパリまんを食べていて、プレーリーと、ビーバーは、4分の1のジャパリまんを食べていた。三人のそばには、ジャパリまんの袋が、三枚重ねて置いてあった。

ビーバー 「ばすの……なにかやりたいことはないツスか？」

ばすの 「いっしょにいたい」

ビーバー 「そうじゃ、なくて……」

プレーリー 「ばすのは、おかあさんとおとうさんと、いっしょにいるだけでいいではありませんな」

ばすのが、うなずいた。

ビーバー 「それじゃあ、いままでやってきたこと、またやってみたいツス」

ビーバーとばすのは、お互いの腰を木のつるで繋いで、湖へ入ろうとした。水に入る

寸前で、ビーバーの足が止まった。

ビーバー 「水に入ったら、ばすのの寿命が変わっちゃうんじゃ……」

ばすの 「いっしょにおよぎたい」

プレーリー 「ビーバーどの、気にかけることないであります！」

プレーリーを小島に残して、ふたりは湖へ入っていった。

ばすのは、立ち泳ぎの姿勢で水に浮かび、両手でつるをつかんだ。それを、ビーバーが泳いで引つ張っていった。

ビーバーが後ろを振り返ると、無表情だったばすのが、ほんの少し笑った。ビーバーは、ばすのに微笑み返した。

ビーバーが、ログハウスのはしごを登って、下にいたばすのを見下ろした。ばすのは、するすると、はしごを登った。プレーリーは、下からその様子を見守った。

ビーバー 「はしごのぼり、うまくなったツスね。えらいえらい」

ビーバーは、はしごを登ってきた、ばすのの頭をくしゃくしゃとなでた。

ばすのは、くすぐったそうにしたあと、今までにない笑顔を見せた。

ビーバー 「う……」

ビーバーは、動揺して、片手で口元を覆った。プレーリーが、はしごを登ってきた。

プレーリー 「ビーバーどの?」

ばすの 「びっくりした? おかあさん」

ビーバー 「……びっくり、したツス……」

翌日。「一日目」 ログハウスの二階。

ばすのが、椅子に座ってテーブルに向かい、模型のホイールを、テーブルの上で転がして遊んでいた。プレーリーとビーバーは、椅子に座って、それを見守っていた。

その遊びは、以前より上達していて、ホイールは、カーブしてブーメランのように手に戻ったり、テーブルの上に置いた木の枝を飛び越えたりした。何回やっても、ホイールがテーブルから落ちることはなかった。

ビーバー 「ばすのはこの遊びの達人ツスね」

プレーリー 「自分もやってみたいであります!」

ビーバー 「プレーリーさんがやると、落としちゃうツスよ」

ばすのが、ホイールをプレーリーの方へ転がした。プレーリーが、それを受け取った。

ばすの 「こつち」

ばすのが、テーブルの上に手首を置いて、手を広げた。

プレーリー 「うけとめてくれるでありますな!」

プレーリーが、ホイールを、ばすのに向けて転がした。ホイールは、転がり始めてすぐに、横に倒れて、止まった。

プレーリー 「ぜんぜんだめであります……」

ビーバー 「転がすだけでもむずかしいツスね」

ばすの 「こんなかんじ」

ばすのが、ゆつくりと手指を動かして、ホイールを転がす動作を見せた。

プレーリー 「なるほど、こうでありますな！」

プレーリーがホイールを転がした。先ほどよりもうまく転がったが、まっすぐ進まず、大きくカーブして転がって、テーブルから落ちた。それを予測したかのように、ばすのが手をのばして、テーブルから落下したホイールを受け止めた。

ビーバー 「すごい……さすがツスねふたりとも」

ばすの 「よくできた」

ばすのが、身を乗り出して、プレーリーに顔を近づけた。

ばすの 「おとうさん、ごほうび」

ばすのが、プレーリーにキスをした。プレーリーが、何かを飲み込んだ。

ビーバー 「ばすの！ それはやっちゃだめだつて……」

ふたりの唇が離れた。

プレーリー 「好きに、させてあげるであります……」

プレーリーが、ビーバーを見て、微笑んだ。

ばすの 「おかあさん、ほしい？」

ばすのが、ビーバーの方を見て、顔を近づけた。

ビーバー 「オレっちはいいツスよ！ ごほうびをもらうことなんて、してないツ

スから」

ばすの 「してる。してくれた」

ビーバー 「……………ちよつとだけツスよ？」

ばすのが、ビーバーにキスをした。

ビーバーから、唇を離れた。そして、こくん、と、何かを飲み込んだ。ばすのの口か

ら、緑色の液体が一滴、垂れ下がった。

ビーバーが、ばすのの口元についた緑色の液体を、指でぬぐった。

ビーバー 「ありがとう、ばすの」

ビーバーがうつむいて、目元をぬぐった。

ビーバーは顔を上げ、微笑んだ。緑色の涙が一滴、頬を流れた。

ばすのが微笑んだ。

翌日の午前。「12日目」 図書館。

図書館から、数人の、鳥のフレンズが飛び立っていった。

はかせとじよしゆが、机に置かれた地図を見ていた。地図には、赤鉛筆で、数本の線が引かれていた。

はかせ 「厄介なのです」

じよしゆ 「強いうえに、いやなコースなのです。警戒地域をふやしますか？」

はかせが、赤い線に沿って、地図を指差した。

はかせ 「ジャングルの東、平原の南、西の森のものにも連絡。山の周囲と砂漠は後回しなのです」 ※5

同時刻。湖のダム。

湖の周囲で、風が強まり、木々が揺れ始めていた。

ビーバーが、ダムの木材を移動して、放水口を開けた。ダムから、勢いよく、水が流れ出した。

昼過ぎ。ログハウスの二階。

いつものように、ばすのが、模型のホイールを転がして遊んでいた。そして、プレー

リーとビーバーが、それを見守っていた。ばすのの手の動きが、以前よりも遅く、鈍くなっていた。

ばすの 「つかれた……」

ばすのが、ホイールを握って、ふらりと、ビーバーにもたれ掛かった。ばすのは、眠そうではなく、言葉通り、疲れて、少し険しい表情だった。ホイールは、ばすのの腕に取り込まれて、腕の、緑色の部分の中に浮いた。

ビーバーは、ばすのの肩を抱いた。その表情は、悔しそうでも、悲しそうでもあった。

プレーリー 「横になって、ゆっくり休むであります……」

プレーリーの声は優しかった。

空を、暗い灰色の雲が覆っていった。そして、雨が降り始めた。

つづく

※1 この時の、湖周辺の気温は、30℃を超えていました。

※2 フレンズたちには、遠方の情報を得る方法が非常に限られています。

園内放送は機能しておらず、テレビも、新聞も、電話も無く、おそらくコンピューターネットワークも利用できません。ラッキービーストは無線通信ができますが、何もしやべりません。

テレビなどの機器は一応あるようですが、アニメー期の設定で、放送局が正常に機能しているのかは不明です。それらが機能していたとしても、機器の使い方がわかるフレンズは、ごく一部でしょう。

フレンズたちにとっての、一番の通信手段は、鳥のフレンズによる情報伝達だと思います。また、もしかしたら、特殊能力で、遠方と情報のやり取りができるフレンズがいるかもしれません（妖怪や、神に近いフレンズもいるので）。

※3 鳥のフレンズたちが、その雲の近くを飛んだところ、予想以上の強風でコントロールを失って、海に落ちそうになりました。

※4 直接、雲の情報収集ができる鳥のフレンズや、天気の変化（雲の動き、気温、湿度、気圧、風の状態、空気のおい、など）に敏感なフレンズが、図書館に集まって、情報を集約し、はかせたちが対策を考えます。

※5 この時点では、サバナナ全域と、ジャングルの西が警戒地域でした。警戒地域の設定は、サンドスターの影響と、嵐の影響のバランスを考慮して行われています。山



の周囲と砂漠は、サンドスターの影響が強いため、はかせは、嵐の影響が弱いと判断しました。

## 第6話 かたち

夕方。ログハウスの二階。周囲は夜のように暗かった。

ばすのが、ベッドの上で、体を丸めて、震えていた。

ばすの 「うう……」

ビーバーは、ばすのに添い寝して、ばすのの背中をぼんぼんと、やさしくたたいていた。

ばすの 「く、うう……」

ばすのは、目をつむって、顔をしかめていた。※1

プレーリー 「こんなことになるなら、はやくお別れしたほうが、よかったです……」

ビーバー 「プレーリーさん、そんなこと、言わないで……」

プレーリーは、ベッドのそばの椅子に座って、ふたりを見守り、ばすのの手を握っていた。

ビーバー 「ばすのから、はなれたほうがいいかもしれないツスね……」

ビーバーが、起き上がった。そして、何かに気づいた。

ビーバー 「ぼすの……」

ぼすのが、ビーバーの服の裾をつかんでいた。

ビーバーは、自分の裾をつかんでいた、ぼすのの手をつかんで、無理やり離れた。そして、立ち上がり、ベッドから少し離れた。

雨と風が、強くなっていった。雨がログハウスの中に吹き込み、床を濡らした。

ビーバー 「……ちよいと、ダムのようにすを見てくるツス……」

ビーバーは、生気が抜けた顔で、ふらふらとはしごに向かった。※2

プレーリー 「だめであります!! ぜったいにだめであります!!」

プレーリーが、ビーバーの腕をつかんで、はしごを下りようとするビーバーを止めた。

ビーバーは、ベッドのそばの椅子に座った。

嵐は急激に勢いを増していった。強い風で、ログハウスが揺れて、きしみをあげはじめた。

プレーリー 「にげるであります!」

ビーバー 「ぼすのが、うごけないツスよ……」

プレーリー 「……ふたりで抱えて、はしごを下りるであります!」

ぼすの 「うう……あ……」

ばすのは、プレーリーとビーバーを見て、必死で何かを言おうとしていた。

ビーバー 「ばすの?」

プレーリー 「どうしたでありますか?」

ばすのの表情が消えた。

ばすのが、プレーリーとビーバーの目を、交互に見た。

ばすのは、手から模型のホイールを取り出した。そして、それを、ビーバーへ向けた。

ビーバーは、それを受け取った。

ばすのの口が動いたが、声は聞こえなかった。

ばすのの姿が消えた。一瞬の出来事だった。

ビーバー 「ばすの!」

ベッドには、バスの模型が残されていた。

ビーバー 「……………まだ、早いッスよ……………」。こんなところで、気を使わなくていい

のに……………」

プレーリー 「さっぱりしすぎであります……………。さようならも、言えなかったであります

ます……………」

ふたりは、沈痛な面持ちで、バスの模型を見つめた。

ビーバー 「わかってたけど……………やっぱり、つらいッスね……………」

ログハウスの屋根が、バキツと音を立てて、丸太一本分ほど浮きあがった。同時に、丸太組みの壁の一部にわずかな隙間ができた。ログハウスの揺れは激しくなり、みしみしと音を立てていた。

ビーバー 「屋根がとんじやう！ おうちがもたないツスよ！」

プレーリー 「ばすのを！」

ビーバー 「ふたつに分けましょう！」

ビーバーが、バスの模型の、トラクターと客車を切り離した。ビーバーがトラクターを、プレーリーが客車を持ち上げた。

屋根のすぐ下の、板張りの壁が室内へ吹き飛び、中のふたりに向かって落ちてきた。ふたりは、バスの模型を守り、背中に板を受けた。

プレーリー 「ぐはっ!!」

プレーリーが、大きめの破片を受けて、うずくまった。

ビーバー 「プレーリーさん！ ばすのは！」※3

プレーリー 「だいじようぶ、であります！」

屋根の木が二本、浮き上がって外れ、外側に落ちた。屋根に開いた穴から室内へ、滝のように水が流れ落ちた。

プレーリーは、起き上がって、はしごのある穴から、階下を見降ろした。

プレーリー 「飛びおりるであります……」

屋根が大きく浮き上がり、爆発したような音を立てて崩壊した。その一部は、室内へと落下してきた。

ビーバーは右から木材の直撃を受け、左に倒れた。彼女は声をあげたが、騒音にかき消された。

バスの模型のトラクターが、吹き飛んで床に転がり、激しい雨に濡れた。

プレーリーは、頭に木材が当たり、階下へ落ちた。

プレーリー 「うあああ!!」

プレーリーが落下する途中で、足がはしごに当たった。はしごが大きくたわみ、段が二本折れて、片方の横木が少し折れ曲がった。はしごは、かろうじて倒れなかった。

プレーリーは、トンネルの縦穴へ落ちていった。

ビーバー 「く……」

ビーバーがわきを見て、目を見開いた。

ぼすの姿が見えた。その姿は、激しい雨にかすんでいた。暗い中、腕の緑色の部分が、ぼんやりと光って見えた。

ぼすのが、ビーバーを見た。その表情は見えなかった。

ビーバーは、目を見開いて、驚いた顔のまま、止まった。

ばすの姿が、古い蛍光灯のように、ちらついて、点滅して見えた。

ログハウスが大きく揺れた。高い所に引っかけかかっていた梁が、まわりの木材といっしよに、落下した。

ばすの姿が見えた場所に、轟音を立てて、いくつもの木材が落ちた。

ビーバーが叫んだが、その声は轟音にかき消された。

トンネルの中。

トンネルの中は真つ暗だった。しりもちをついたプレーリーが、何かを拾って、それを見た。

プレーリーは、それを、そつと地面に置いて、歯を食いしばって立ち上がり、目元をこすった。

プレーリーが、トンネルの外へ飛び出した。水が、津波のように小島に打ち付けた。湖の水位が上がり、盛り土で囲われた、トンネルの入り口に迫っていた。

ログハウスの二階。

ビーバーが、這うようにして、ばすの現れた所へ向かった。

ビーバー 「ばすの!! ばすの!!」

ビーバーは、落ちてきた木材をどけようとした。

プレーリーが、はしごを三段飛ばしで登ってきた。段が一本はじけ飛んで、先ほど曲がった部分が、大きく折れ曲がった。

ログハウスが大きく揺れた。はしごが外れ、倒れた。はしごは、増水した湖の中に落ち、しぶきを上げた。

プレーリーが、ビーバーの肩を引いた。

プレーリー 「ビーバーどの!! にげるであります!!」

ビーバー 「ばすのが! ばすのが……もどつてきた……」

ビーバーの声は震えていた。

プレーリー 「にげるで、あります!!」

プレーリーは、ビーバーをはがいじめにして、無理やり、ふたりいつしよに、はしごのあった穴から飛び降りた。ふたりのいた場所に、壁の丸太が転がった。

翌日。「13日目」 BGM:『風』

嵐が去った。快晴だった。



ダム of 放水口から、勢いよく水が流れ出していた。

ログハウスの下の、トンネルの入り口のまわりまで水が来ていた。水は、盛り土で止まり、トンネルは無事だった。水位が一番高かったときの跡が、盛り土やログハウスの支柱に残っていた。

ログハウスは、屋根の全くと、壁の半分ほどが破壊され、失われていた。下の太い支柱や、二階の床は、ほぼ無事だった。

折れ曲がったはしごは、太い木の枝を当てて、つるを巻き付けて、仮修復されていた。プレーリーとビーバーが、二階の床に散乱した、木材をどけていった。ビーバーの右の二の腕には、ひっかき傷があり、血をふき取った跡があった。

ビーバー 「ー」

ビーバーが、驚き、何かを拾った。それは、バスの模型の、行き先表示板だった。

ビーバーが、その近くの木材をどけた。床が見ええると、ビーバーはひぎをついた。

ビーバー 「……………」

床には、木材に潰されて、砕け散った、バスの模型のトラクターがあった。それは、濡れた、丸太組みの床に散らばって、張り付いていた。

プレーリー 「ひどい……。こんなの、あんまりであります……」

ビーバーは、床に座って、模型の残骸を見つめて、放心していた。

ビーバーとプレーリーが協力して、飛び散った模型の破片を拾った。その一部は、二階の床から、丸太の隙間を抜けて、一階まで落ちていた。

天板が失われて『おかあさんの木』だけになったテーブルの上を、プレーリーとビーバーが見つめていた。ふたりは、隣り合って、椅子に座っていた。

ビーバー 「もどつてきて、くれたのに……。模型の、すがたならっ！ いっしょにいられる、はずっ、だったのにつ……」

ビーバーは、うつむいて、ぼろぼろと涙を流し、むせび泣いた。『おかあさんの木』の上には、バスの模型の部品や破片が集められていた。模型は、完膚なきまでに、壊れ、潰れ、砕けていた。トラクターだけでなく、客車も、大きい部分が四つに割れており、細かい部品が外れたり折れたりしていた。

プレーリー 「守れなかったで、あります……」

プレーリーは、上を向いて、目を閉じて、涙をこぼした。

ビーバー 「ぐす……これはもう、なおしようがないッス、ね……」

ビーバーは、隣のプレーリーを見て、無理やり笑顔を作ろうとして、涙をこぼした。

プレーリーが、ビーバーを見て、その背をぽんと叩いた。

プレーリー 「ビーバーどのなら、ばすのをなおせるであります！」

ビーバーが、再び模型の残骸を見て、すぐに目をそらした。

ビーバー 「むちや言わないで……」

ビーバーの声は、かすれていた。

プレーリー 「自分も手伝うであります！ きつとなおせるであります！ あのと  
きみたいに」

ビーバーは、胸ポケットから、模型のホイールを取り出して、それを見つめた。

ビーバー 「……………くつつけるものがあれば……………時間はかかるけど……………」

ビーバーは、顔を上げて、目元をぬぐった。

ビーバー 「……………できるかも、しれないツスね」

ビーバーとプレーリーは、少しずつ、バスの模型を修復していった。

BGM：『風を感じて』

プレーリーが、松やにや樹液から、接着剤を作った。その作り方は、ビーバーが教えた。※4

ふたりは、立体のパズルのように、砕けたバスの模型の、破片を組み合わせた。

大きな破片同士の接合には、細い木の枝を加工したダボや、木組みなどが使われた。それは、ふたりが今まで培ってきた技術だった。さらに、接合部を強くするために、接着剤を使った。小さな破片は、接着剤で、一つ一つ接着していった。

ひどく変形していたり、破片が見つからなかった部分は、『ばすの木』を削り取って、接合面が合うように、少しずつ削って調整して、代わりの部品を作った。

模型は、つなぎ目だらけになってしまったが、接着剤を混ぜた木のくずで、隙間を埋めることで、つなぎ目を目立たなくすることができた。

プレーリー 「すばらしい出来であります！」

ビーバー 「もうちょっときれいにしてあげたいツスね。こことか」

ビーバーが、バスの模型の客車の、欠けた部分を指差した。

プレーリー 「ビーバーどの、いいかげん休まないと、倒れるであります……」

ビーバー 「やりはじめると、止まらなくなっちゃうんすよ。……そうっスね。きょうはここまでしておくツス」

プレーリー 「また、手伝わせてほしいであります！」

ビーバー 「おねがいするツス。でも、こわさないでほしいツス……」

『おかあさんの木』の上で、バスの模型は、かつての姿を取り戻していった。

図書館。

BGM:『ようこそジャパリパークへ』オルゴール ver.』

じよしゆ

「……あとすこしで完成、だそうです。はかせ」

はかせ

「あんな状態からなおすなんて……ビーバーとプレーリーの能力は、異

常なのです」

じよしゆ

「あれは、執念のなせるわざなのでしょう」

はかせ

「未練がましいのです」

じよしゆ

「未練がましいのは、われわれも同じなのですよ」

はかせ

「……あの子たちも、なおせるかもしれないのです」

ふたりは、図書館の地下の書庫へ向かった。その一番奥の棚に、細長い、大きな木箱があった。木箱は、ふたりの身長の三分の二ほどの長さがあった。

はかせが、木箱を開けた。

はかせ

「ひさしぶり、なのです」

木箱の中には、木の杖 ※5 が二本あった。そのうちの一本は、真ん中あたりで折れていて、折れ口のそばに、いくつかの破片があった。もう一本は、持ち手の部分が大きく欠けていた。

はかせ 「これは、むこうよりも、簡単になおせるのです。じよしゆ」

じよしゆ 「すぐに持つていきますか？ はかせ」

はかせ 「あのふたりの……三人の、じゃまをしてはいけません。この子たちを、なおしてもらうのは、いつか、でいいのです」

おわり

※1 三人は、『何も選ばない』ことにしました。それなのに、ここで、ばすのに、痛みが生じてしまっているのは、プレーリーとビーバーが、サンドスターをばすのに分け与えて、接触をし続けていたためです。第5話で湖を泳いだ影響もあります。

ヒト化した直後は、ばすのは痛みが理解できていませんでしたが、心の成長に伴い、理解できる（感じられる）ようになりました。

※2 ビーバーは、精神的に疲れ切っていて、正常な判断ができていません。ダムは、

嵐の気配が見えたときから放水していましたが、ビーバーは、それでは足りない、と考  
えました。もっと早く、放水量を増やしていれば良かったのですが、ばすののほうが一  
にかかっている、できませんでした。

※3 プレーリーは体が頑丈なので、ビーバーは、模型の方しか気にしていません。  
結構ひどいです。

※4 松やにから接着剤が作れるようです。ただ、私は詳しいことはわかりません。  
接着強度や、経年劣化の問題があるかもしれません。

※5 杖ではないかもしれませんが。ステッキのような武器のような……。

それは、灰色で、上の部分は、頭の片方がとがった、ハンマーのような形をしていま  
す。

## あとがき・設定

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

反省点と言いつつばかりの、あとがきです。

『もけい』は『ぼすの』というキャラクターが先にあり、そこから膨らませていったおはなしです。『ぼすののための物語』とも言えます。その割にはぼすのの扱いがひどいですが……。

物語や文章が固（硬）すぎて、面白くなくなってしまうのは、私の悪い癖です。あと、終盤の展開がかなり雑です。選択肢の話が出たあたりで、引いてしまう（読む気がなくなってしまう）人もいるかもしれません。より良い作品にできるアイデアを思いついたら、直したいです。

『もけい』は、何かにそっくりです。あれのパクリじゃないか？　と言われれば、返す言葉ありません。ただ、言い訳すると、このおはなしの芯は、王道パターンなのです。その流れは、



← 主人公の前に、常識から外れた、特殊な存在（キャラクター）が現れる。

← 特殊な存在が、居候状態になったり、主人公と共に旅するなどし、いつしよにいる状態になる。

← （最初はお互いに戸惑ったり、ぶつかったりする。）

← 主人公と特殊な存在が、絶対に離れられないほど仲良くなる。

← 避けられない別れが来る。特殊な存在がいなくなる。

← ?

← という感じですよ。

← こんな物語はたくさんあります。あらすじを読んだだけで、どうなるのかわかってしまいう方もいると思います。でも、いいですよね王道パターン。

← この王道パターンの結末は、大まかにいって3パターンあり、

← (A) 別れを回避できた。あるいは、戻ってくる、復活する、偶然に再会 など。

(B) 二度と再会できなかった、戻ってこない、死別 など。

(C) (A) (B) のどちらかは明言しない。受け手の解釈、想像に委ねる。となりませす。

『もけい』の結末を、上の3パターンのどれにするのか、迷いました。その結果、(B)にしたのですが、(C)ともとれます。ハッピーエンドではないので、不満を覚える方もいらつしやるかもしれません。ごめんなさい。私自身も、ばすのに思い入れができていたので、バスの模型が壊れてしまったのはショックでした。

実は、(A)も、粗で書いたのですが、ボツにしました。

選択肢を設けて、リンクをはり、結末を複数用意する案もあつたのですが、やめました。その理由は、結末をぼかしたくなかつたことと、三人称だつたためです。第5話に選択肢が書かれているのは、その名残です。

こうなつた理由は、私の好みです。私は、きれいなおとぎ話みたいなものに、悲劇的な要素が入っているのが、大好きなんです。同じ悲劇でも、どろどろしたやつは苦手です。悲劇が好き、というのは、ちよつと悪趣味な気もします。

第2話のラストで、はかせに「このようなものがたりは、悲しい終わりかたをするこ  
とが多いのです」と言わせたかつたのですが、やめました。

文中に、BGM指示（BGM：『○○』）を入れようかと思ったのですが……。

・ 私は選曲のセンスがない。

・ このおはなしの内容だと、暗い曲ばかりになる。『けもの達の哀しみ』『不安な瞬間』『ようこそジャパリパークへ、オルゴールVer.』『凧』あたりを多用しそう。

・ アニメのサントラの曲だけだと足りない。場面に合わない。（サントラ未収録の曲も多い）

・ 指示が複雑になると、読み手が文章に集中できなくなる。

・ 書き手も文章に集中できなくなる。

など、問題だらけなので、やめました。

「13日目」だけは、例外です。迷った末、やってしまいました。

BGMによって場面の印象が大きく変わるので、なんとかしてみたい気持ちもあります。でも、SSにBGMを付ける、というのは無理があります。ノベル系のゲームみたいなものや、動画ならBGMを流せますが、私にはハードルが高すぎます。

シナリオを書いて、絵（背景画）を描いて、曲のアレンジや作曲をして、プログラム（スク립ト）を書いて……無理です。フリー素材でなんとかする、という手もあります。が、それでもかなりの手間がかかります。

『文章だけで勝負する』『文章だけで伝わるように』、というのが理想ですが……結局、

問題は、私の力不足です。

『もけい』は、フルルの『やくそくのうた』（ペパプ・イン・ザ・スカイ!）の歌詞に似ている所があります。偶然ですが、私が無意識に似せてしまったのかもしれない。

今回は、『はかせ』と『じよしゆ』と『われわれ』をひらがなにしました。過去に書いたものでは漢字で書いていましたが、ひらがなの方が合っているかな、と思ったのでひらがなにしました。『じよしゆ』は、漢字のほうがいい気もしますが……。

『ぼすの』は、読みやすさを考えて、カタカナにしようか、とも思いましたが、私の好みで、ひらがなにしました。

フレンズのセリフでは、ひらがなを増やしたいのですが、やりすぎると読みづらくなるので、適度に漢字を混ぜています。

私が書いたものに共通する問題として、キャラクターが別人になってしまうことと、原作のキャラクターの特徴を使っていない、ということがあります。

そうなるってしまう原因は、アイデアやシナリオが先行しており、それを、キャラクターに演じてもらう形で書いているからです。以前書いた、『ひこうじよう』シリーズがまさにそれです。このやり方では、二次創作としては中途半端なものになってしまいます。

原作に寄せたいのですが、失敗しています。今後の課題です。

SSを書き始めた頃よりも、読み手にやさしい文章を目指して、工夫しています。でも失敗している気もします。

それ以前の問題として、日本語がおかしくないか？とか、これで言いたいことが伝わるのか？とか、説明しすぎじゃないか？など、いろいろ不安な所があります。自分の書いたものを客観的に見られないのです。これも、今後の課題です。

そもそも『今後』があるのか？という疑問もあります。

私は、書きたい時に、書きたいものを、書きたいように書きます。

『SS』は、『好きなものを、好きなように』の略ですから（違います）。

『もけい』 オリジナル設定

\*は、本編で使用しなかった設定や、裏設定的なものです。

バスの模型（もの）

アメリカビーバーの作った、ジャパリバスの木製模型。ログハウスを作った際に余った木材を、十分に乾燥させたものから作られた。\*もともとは、ビーバーが、バスの改造（水陸両用化）を行う際の設計用として作ったもので、それにさらに手を加えて、ディテールアップした。オグロプレーリードッグも制作に協力した。

全長は500mmほど（大体1/12スケール）無塗装。かなり精巧なつくりで、手すりなどの細い部分は、木の枝や針葉樹の葉を加工して作られている。車内も再現されているが、実車よりも狭い（壁や天井が肉厚）ため、車内で再現できているのは大きい形状まで。トラクターと客車が分離できるが、連結部は実車よりも大振り。繊細なつくりのため強度は低く、部品が外れやすい。ホイールが回転するが、動きは固く、あまり回すと壊れる。ホイールの直径は60mmほど。サンルーフや窓の開閉はできない。松やにや樹液を加工した、接着剤が使われている。

バスの模型（キャラクター）愛称（略称）：ばすの（ひらがな）

アメリカビーバーの作った木製模型が、水に濡れて、サンドスターが当たって、ヒト化した存在。フレンズでもセルリアンでもなく『フレンズの模型』または、『セルリアンの模型』。不完全で不安定な存在。多分女の子。

『ばすの』という愛称は、オグロプレーリードッグによって命名された。

『ばすの』の発音アクセントは、元と違い、平板か尻上がり。『まこと』みたいな感じ。

・ 外見は、フレンズと同じくヒトベースで、背の高さは、平均的なフレンズの身長よりもやや低い。ジャパリパスのような『耳』と、先端が切り落とされた、木の枝のような『しっぽ』がある。

顔は、かばんとミライさんの中間みたいな感じだが、やや幼い。瞳は暗い緑色（針葉樹の葉の色）。髪は、暗い茶色の木目調で、セミロング。

・ 腕は、二の腕からひじを含む部分が肌色で、そこから先、前腕から手までが半透明の緑色（スライムっぽい感じ）。肌色と緑色の間はグラデーションになっている。緑色の部分は、暗闇でぼんやりと光って見えて、内部には細かい泡のようなものがあり、それは、キラキラ光りながら、ゆっくりと動いている。

・ 服などは、薄い茶色の木目調で、デザインはミライさんのようなパークガイド風。五個のホイール（一個が欠けている）、ランプ類、バッテリー、サンルーフなど、バスのパーツをイメージしたものがついている（服、靴、帽子、アクセサリなど・詳細未定）。服よりも、髪のほうが色が暗い（濃い）

→『バスの模型（ばすの）』の設定画（デザイン案）です。

描いてしまいました。これは一つの案であり、仮のものです。体のバランスとか、かなりいい加減な絵です。バスのパーツをどこに持っていくかは、もつといい案があると思います。ズボンの裾と、袖（右のみ）と、靴に、タイヤをイメージしたものがついていますが、ぼつてりして格好悪いので、もうちよつとなんとかしたいところです。あと、フェンダー（泥除け）があつた方がいいと思います。

・ 体内はヒトとは異なり、緑色の部分以外は木のような質になっている。\* 一応、臓器のようなものは存在する。

・ 体から木のような香りがする。

・ 口数はとても少ない。純真無垢で優しい性格。

・ 口数の少なさや、シンプルな応答から、周囲には幼い印象を与える。だが、頭は良く、表に出さないだけで、結構いろんなことを考えている。

\* 名前（愛称）を与えられたことで、知性や言語能力のスイッチが入り、心が急速に成長した。

\* ヒト化した直後は、痛みが理解できていなかったが、心の成長に伴い、理解できるようになった。ただし、その痛みはヒトとは異なるものであり、精神的な面が大きい。

\* 無知だが、植物や、ジャパリバスに関する知識は持っている。



・ 一人称は「ぼすの」。二人称は、「あなた」または呼び捨て。例外として、アメリカビーバーのことを「おかあさん」、プレーリーのことを「おとうさん」と呼ぶ。

・ 木と、『対話』ができる。死んだ木とは対話できないが、状態や素性を調べることができる。

・ 身体能力は全体的に低く、体がもろい。

・ ダメージを受けても、ある程度は自己修復できる。

・ 短時間だけ大きな力を出すことができる。だがこれは、体に負荷がかかり、サンドスターを大きく消耗して、寿命を縮める。\*大きな力といっても、動きの速さは、ほんの少し早くなる程度。

・ 緑色の部分で光合成ができる。太陽の光をあびるのが好き。

・ 燃費が良いので、一般的なフレレンズよりも小食。

・ 泳げるが、極端にスピードが遅く、\*潜水ができない（ほとんど浮いているだけ）。

・ 水や土と相性が良く、地質を見抜くことができる。

・ キスをすると、相手は、緑色の、葉っぱの味がする液体（青汁?）を飲まされる。この液体には、サンドスターが含まれている。

・ 自身の一部である、模型のホイールの一個が、脱落（分離）している。これは、ト

ラクターの、フロントの左側のもの。模型の姿だった時に、プレーリーが壊した部分。

\* アニメでは、12話で黄色になっていたもの。まんまる。

・ 模型のホイールを、テーブルの上で転がして、トリツキーな動きをさせて遊ぶ。基本的に、ホイールに逆回転をかけて、ヨーヨーのように手に戻る動きをさせる。

・ 腕（手）の、半透明の緑色の部分は、スライムのように、多少形を変えることができる。ここに、模型のホイールを取り込んで、『収納』することができる。

\* 故障したバスを修理する能力がある（道具は使わず、手作業）。

\* 火が苦手（弱点）。

ばすのを誘拐しても……じゃなくて、ばすのを、ご自分の作品（SS・漫画・イラスト等）に使っていただいても構いません。ばすのの見た目は、はつきりしていません。その姿を見てみたい、という私のわがままです。ただ、誘拐しても、あんまりいじめないであげてください。

おかあさんの木

バスの模型のもとになった木の、親の木。

プレーリーが、この木を切り倒し、それをプレーリーとビーバーが加工して、丸太の

輪切りにした。 \*これは、アニメ7話で、アライさんが座っていたもの、という設定。

その後、ビーバーがテーブルの天板を設計して、プレーターがそれを製作した。

ふたりは、丸太の輪切りに天板を乗せて、テーブルにした。

→テーブルの設定画です。

## 二本の杖

ゲームアプリ（ネクソン版）などのイラストで、はかせとじよしゆが持っている、杖のようなもの。アニメ1期では、なぜか持っていない。

\*これらの杖は、昔、セルリアンとの戦いで破損して、『フレンズの模型』になり、はかせたちと親しくなった。そのあと、もとの姿に戻った。はかせとじよしゆは、戻るのを必死で止めようとしたが、止められなかった。これらの杖は、長い時間、図書館の地下の書庫に、木箱に入れられて保管されていた。だから、アニメ1期では持っていないかった。

というのが、『もけい』での設定。

フレンズの模型（セルリアンの模型）の設定

・ 生まれる流れ

木を加工して、器物が作られる。ここで、作り手の思いが込められる。または、いのちのかけらが込められる。

←

器物が、使われる。愛着を持った使用者（フレンズ）の思いが入る、または、いのかけらが入る。通常、これには長い時間がかかる。ばすの場合は、初めから模型として作られたため、期間が短かった。\*これは、木彫りの像や、人形などでも同じで、これらもヒトの姿になるまでの期間が短い。

←

器物が、破損する。

←

器物が、水に濡れて、そこにサンドスターが当たる。

←

器物が、ヒトの姿になる。

・ 五つの性質を持つ。

植物（木）。

器物そのもの。ばすの場合は、模型。

器物のモデル（モチーフ、イメージ）。ばすの場合は、バス。

フレンズ（の模型）。サンドスターに由来する。

セルリアン（の模型）。サンドスター（ロウ）に由来する。

・ もとが植物なので、運動は苦手。

・ いのちを持っておらず、代わりに、『いのちの模型』を持っている。これは、作り手や使用者の、思い入れにより形作られたもので、不完全で不安定なものであり、長続きしない。

・ ヒトの姿でいられる期間は、条件によってまちまち。多くは、二週間から三週間ほどで、もとの姿に戻る。体を動かすと、サンドスターや、『いのちの模型』の消耗が大きくなり、寿命を縮める。\*稀だが、一か月以上ヒトの姿を維持できた例もある。

・ 親（製作者・制作者・使用者）との接触を増やす、水や栄養分、サンドスターを与える、などの延命策があるが、うまくいくとは限らない。これは、自然な流れに逆らう行為なので、もとの姿とヒトの姿の要素が混在して、心や体に苦痛が生じることもある。

・ サンドスターといのちの模型を、ほとんど失った状態では、短時間だけでもとの姿に戻り、再度ヒトの姿になることがある。\*これは、もとの姿に戻る前兆の一つであ

る、『点滅』（蛍光灯のちらつきのようなもの）で、非常に不安定になっている状態である。

・ その他の前兆としては、声を出せなくなる、体が動かなくなる、感覚が鈍くなるなど、ヒトとしての機能が低下することがあげられる。

\* 一度、完全にもとの姿に戻ったものは、壊れたり、朽ち果てたりするまで、その姿のまま。再びヒトの姿になることはない。

\* 例外として、原型をとどめないほど壊れたものを材料にして、再び何かを作った場合は、非常に確率が低いものの、別人として、再びヒトの姿になる可能性がある。

## 第13話 おまけ

とある雑居ビルの地下。

階段を下りた先には、防音扉があった。

扉の上には『上映中』のランプがともっていた。

「試写室」

映写機が止まり、部屋が明るくなった。

BGM：『かわいい2匹』

ビーバ「ううう……ぐぐす」

プレリ「ビーバーどの、そんなに泣くことないであります」

ビーバ「だって、ばすのが、ばすのが……」

ばすの「ここにいる」

助手「ばすのは、ここに居てはいけないのではないですか？」 ※1



はかせ 「気にはだめなのです。助手」

ビーバ 「ばすの、撮影中に本当に倒れそうになるし、心配したツスよ……」  
ばすの 「おしばい」

プレリ 「天才子役だったであります！」

ビーバ 「声がかすれるところ、すつごくうまかったツスよ。あとは、無表情の演技がよかったツスねえ。あれのおかげで、笑顔が引き立つツスよ」※2

博&助 「親ばかなのです（ハモってる）」

はかせ 「子役というか、年齢不詳なのです」

ビーバ 「たしかに、ばすのって何歳なんスカね？」

ばすの 「ひみつ」

はかせ 「なんで隠すのですか？ あやしいのです」

プレリ 「ばすのは、うまれたばかりであります」

助手 「木だったときの時間が入ってないのです」※3

はかせ 「われわれの年齢は……フレンズ化したあとの……する前の……」

助手 「……………」

ビーバ 「わからないツスよね……」

はかせ 「そ、そんなことはどうでもいいのです。映画のはなしに戻るのです」

ばすの「いまいちだった」

ビーバ「ばすの、そんなこと言っちゃだめツスよ！」

助手「正直、いまいちなのです」

プレリ「そんなことないであります！」

はかせ「ベタなうえにかたい、たしかにこれはいまいちなのです」

助手「しかもバッドエンドですからね」

プレリ「バッドエンドじゃないであります！　ちゃんと模型はなおったであります

！※4

ビーバ「まあ、ちよつと悲しいおわりかただったツスね……」

ばすの「みんながんばった」

はかせ「がんばったのはたしかなのです」

助手「それは、登場人物ですか？　それとも、われわれのほうですか？」※5

プレリ「両方であります！」

はかせ「プレリーはNGだしまくって大変だったのです」

プレリ「監督がなかなかOKだしてくれなかったであります！」

助手「車輪を転がすところ、なんテイク撮ったのですか？」

ビーバ「何回目なのか、だれもわからなくなるくらい撮ってたツスね……」※6

プレリ「あれはむずかしすぎたであります！」

ばすの「セットこわした」

プレリ「う」

助手「トンネルの事故のところですね。あのセット、大量の水を使うので、結構お金がかかったらしいですよ」※7

プレリ「めんぼくないであります……」

ビーバ「でもプレリーさん、最後の方、かつこよかったツスよ。オレっちは、なきけない感じだったツスけど」※8

はかせ「演技はへたでも、存在感だけはあったのです」※9

プレリ「ビーバーどのは、むずかしい繊細な演技、すごかったであります！」

ビーバ「プレリーさんだって、むずかしいシーン多かったツスよ。惚れなおすくらい、かつこよかったツス」

プレリ「ビーバーどの……」

はかせ「あー、あー」

ビーバ「ちよ、ちよつとプレリーさん、そういうのは、ここでは、その……」

はかせ「そういうのは家にかえってやりやがれ、なのです」

ばすの「なかよし」

助手「はかせの演技もなかなかのものなのです」

はかせ「やめるです。あれはかなり恥ずかしかったのです」

ビーバ「オレっちは、キスが多くて、恥ずかしかったツスね……」※10

プレリ「なぜはずかしいでありますか？」

ばすの「さっきのおいしかった」※11

ビーバ「わああ！ なに言ってるんスか!? ばすの！」

ばすの「もらったら、かえす」

ビーバ「ばすの、いまはだめ、やめるツス……んっ」

助手「ほんとうにやりやがったのです」

プレリ「口うつしでサンドスターをわたすのは、もらうのも、あげるのも気持ちいいでありますよ！ はかせたちも

中略。

ビーバ「お水を持ってきたツス……」

はかせ「んくっ、んくっ………まだ口の中がにがいです……」

助手「ごくっ……おえっ……家がっ、壊れるところは、大変だった、らしいですね……」

## ※12

ビーバ「おうちが壊れるところは、こまかく何回も撮ったツスね。完成したらどうなるのかよくわからなくて、今日初めて見たんすけど、あんなに撮ったのに、意外と短かったツスね」※13

プレリ「木をつりあげたり、雨をふらせたり、おっきな風をおこしたり、すごかったであります。でも、屋根がとぶところは、あんなにはげしく壊れていなかったであります……」

ビーバ「あれどうやって撮ったんすかね？ ふしぎツスね……」

はかせ「あれは……」

ばすの「CG」

助手「さきに言われてしまいましたね……」

はかせ「ばすのはなんでそんなことを知ってるのですか？」

プレリ「しーじーってなんでありますか？」

ビーバ「オレっちも気になるツス」

ばすの「みんなのこと」※14

間。

助手「……アクションはほとんど生身でやったそうすね」

「はかせ「フレンズは頑丈だからって、むちやさせすぎなのです。こんど文句言ってるです」

ビーバ「プレリーさん、何回も落ちてたツスね……」

プレリ「あれも監督がOKだしてくれなくて、何回もやっただありますよ」

ビーバ「はしががうまく折れなかったんスよね。あれ、もろい木を使っただありますよ。オレっちがアドバイスしたツス」※15

ばすの「痛くなかった？」

プレリ「痛かったです……」

ビーバ「オレっちも、木がぶつかってくるところ、痛かったツス……」※16

助手「ばすのは、痛みがわからないのではないですか？」

ばすの「りかいした」※17

はかせ「うでが折れるところは痛そうだったのです」

ビーバ「あれはつくりものうでっスよ。すごくよくできてったツスね」※18

プレリ「手のかたちが変わるところは、ほんとうにやっただあります！ ばすのが水を守るの、かつこよかったです！」

ばすの「つかれた」※19

はかせ「われわれは、頭をつかうだけの役でよかったのです……」

助手「主人公はいろいろやらされるのです」※20

はかせ「泣く演技はむずかしくなかったのですか？」

プレリ「きもちが入れば、涙がでてくるであります。自分は、大泣きではありませぬが、ビーバーどのは、すごいであります！」

ビーバ「ほんとうに、こんなことになったら、つて思うと、自然と、泣けてくるツスよ……」

はかせ「また泣いているですか？」

BGMフェードアウト

BGM：『風』

ばすの「ほんきで泣いてくれて、うれしかった」

ビーバ「……うわー、どうしよう、オレっち……いますつごいしあわせツスよ……」

プレリ「自分まで、泣けてくるであります……」

BGMストップ  
ガシャーンと音がした。

BGM：『楽しい仲間達』

プレリ「いまの、うしろでありますな」

はかせ「あの子たちはなにやってるですか？」

ビーバ「なんかさつき、『フィルムがきれた』とか言ってたツスよ」 ※21

はかせ「……ちよつと映写室のようすを見てくるです」

助手「あの子たちにまかせたのは、失敗だったのです」

おわり

※1 結構ひどいことを言っています。私は深く考えて書いていません。



※2 ぼすのは、無表情な中に、かすかな表情があります。仕草の演技も上手いのです。天才的です（私も親バカです）。

※3 木だった時の時間だけでなく、模型の制作期間を年齢に含めるのか？ という問題もあります。

※4 直る直前までしか書いていません。

※5 私もがんばりました。自分で言うのもどうかと思いますが……。

※6 プレリーリは器用だから、簡単にできるかと思ったのですが、甘かったです。程よくカーブさせなければならなかったので、余計に難しかったようです。ぼすのもプレリーリも、本人が、特殊効果なしでやっています。

※7 プレリーリが壁に手を突っ込むところで、壊してはいけなくところまで壊してしまいました。結果的には、迫力のある映像になったので、OKです。ただ、そのあと、ぼすの水を止めるところの撮影のために、セットを修復しなければなりませんでした。あのセットは、水を使うだけでなく、本物の土壁を作ったので、手が込んでいました。

トンネル内のシーンでは、明るくなりすぎない、自然な照明が難しかったです。

※8 プレリーリは、序盤では失敗が多いのですが、中盤以降は格好よくなっています。ように書きました。

※9 プレリーは、ちゃんと指示通りに動いてくれたので、とっても助かりました。繊細な演技が必要なシーンで、何回も撮りなおしになっても、がんばってくれました。

※10 キスシーンは、本当にサンドスターを渡さなくていい、って言ったのに、彼女たちはやってくれました。さすがに、倒れるような量は渡していません。

※11 上映中はちゃんと映画を見てください。

※12 三人が住むログハウスを壊すわけにはいかず、撮影用にログハウスのセットをまるごと作りました。ログハウスが壊れるシーンは一発では撮れず、壊れた部分をなおして、数回撮りました。

※13 同じカットを、条件（カメラアングル、照明、降雨など）を変えて何回も撮ったり、編集でカットしたりしたので、撮影した量よりも、映画として完成したものは、かなり短くなりました。

※14 もう、けもフレのアニメを3DCGで制作することはないのかもしれないかもしれませんが。2Dのアニメも、CGには変わりありませんが。

2018/09/03 追記 3DCGで作るっぽいです。

※15 初めから、はしごには折れやすい木を使っていました。でも、それでもうまくいかず、ビーバーにアドバイスをもらいました。木に、あらかじめ切り込みを入れたことと、段を外れやすくしたことで、はしごの折れ方をコントロールできました。非常

に助かりました。ただ、プレーリーの足や体がうまくはしごに当たらず、何回も撮りなおしました。もちろん、落下する所にはクッションを敷きました。

※16 普通、役者に物がぶつかるような撮影では、軽くて柔らかい（もろい）ものを使いますが、今回はリアルさを重視して、本物を使いました。ただし、木材をケープブルで吊るすなどして、衝撃を抑えています。体が頑丈とはいえ、かわいそうなことをしてしまいました。

※17 ばすのは、本編でも痛みを感じている場面があります。ただ、あれは精神的なものが多いです。ばすのの知っている痛みは、ヒトのそれとは違います。

※18 「つくりもののうで」は、ばすのの腕を型取りして、半透明のやわらかい素材で作りました。中のキラキラを表現するのが難しく、素材の中に、光を反射する粒を混ぜて、照明でごまかしています。折れ口は、本物の木を折って作りました。

同じ型を使って、土色が混ざった腕も作りました。

※19 撮影時の水量、水圧はそれほど大きくありませんでしたが、水しぶきを別の場所から飛ばしたり、照明やアングルを工夫することで、派手に見せています。それに加えて、後処理で水しぶきを増やしています。

※20 『もけい』は、5人全員が主役であり、脇役は、ちよつとだけ出てきた鳥のフレンズだけです。プレーリー&ビーバーが主人公です。ばすのはヒロイン的な扱いで

す。はかせとじよしゆは、裏主人公です。杖の子たちは、裏ヒロインです。

※21 フィルムを使う映写機は、今はあんまり使わないかもしれませんが。